

紀要愛媛

第 7 号

香川県音谷池遺跡の船野型細石核	多田 仁	1～5
愛媛県出土埴輪の基礎的研究 (7) —松山平野における中期古墳の埴輪について—	山内 英樹	7～22
馬越遺跡出土の貿易陶磁器について	神石 都	23～47
中世伊予国の煮炊具について	中野 良一	49～60

2007

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター

刊行にあたって

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターでは、愛媛県内において埋蔵文化財の調査研究及び埋蔵文化財に対する保護思想の普及・啓発を目的に業務を進めております。

当センターの調査成果につきましては、調査報告書にまとめ刊行するとともに、調査の概要は年報『愛比売^{えひめ}』に掲載し、さらに発掘調査に伴う現地説明会、当センターでの速報展・テーマ展を行い、埋蔵文化財の普及・啓発に努めております。

このたび、当センター職員の埋蔵文化財に関する日頃の研究成果をまとめた研究紀要『紀要愛媛』第7号を刊行することとなりました。この研究紀要が、皆様方の歴史や考古学の研究の上で、ご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、今後とも関係諸機関並びに関係者の皆様に、ご協力とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター
理事長 野本 俊二

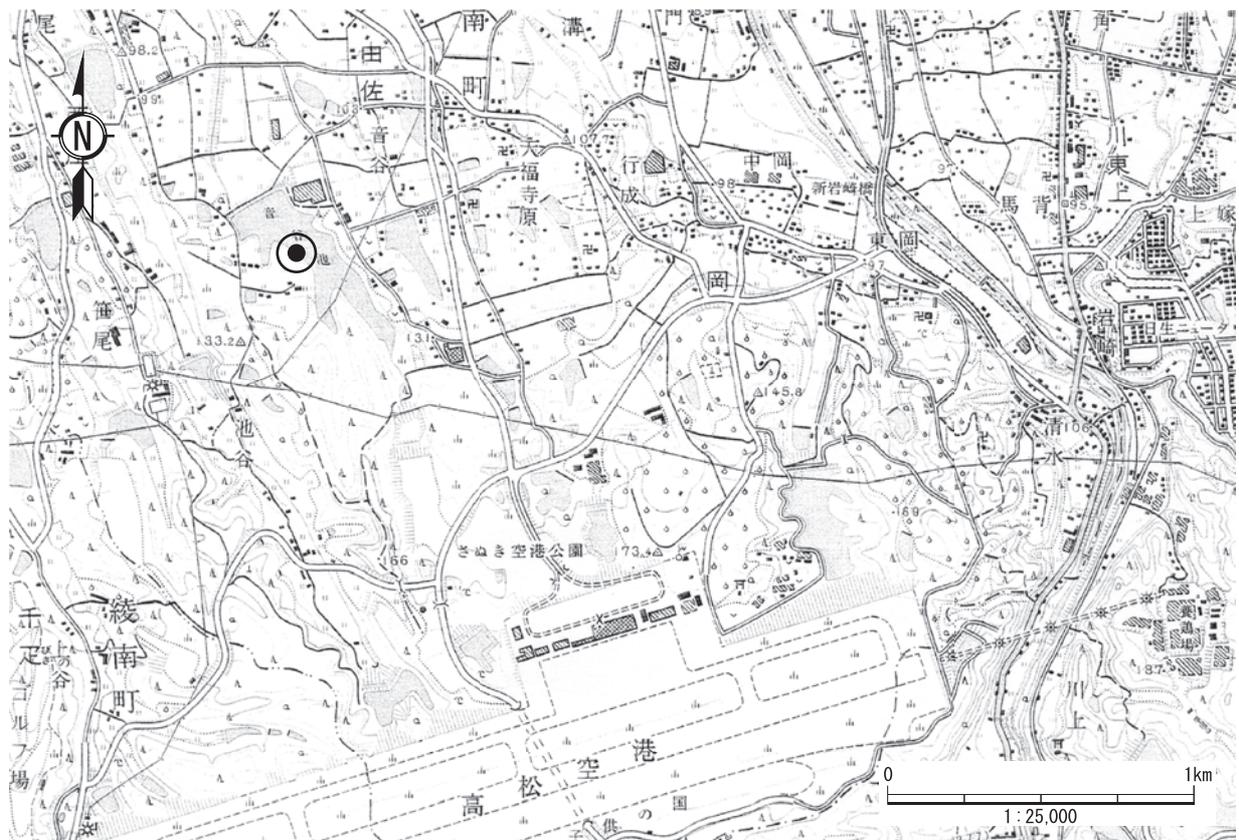
香川県音谷池遺跡の船野型細石核

多田 仁

1 はじめに

香川県高松市香南町由佐の音谷池遺跡において、サヌカイト製の船野型細石核1点が採集された(第1図)。船野型細石核は主に東九州で密に分布する細石刃生産技術の一型式で(橋 1975・1979)、香川県内では現在までに約10カ所の遺跡で細石核が確認されているが、その多くはハリ質安山岩を使用した羽佐島技法と呼ばれる細石刃生産技術によるものが主体で(多田 2001、渡部 1982)、サヌカイト製による船野型細石核の報告は知るかぎり初例であろう。本稿ではこうした資料の存在を重視し、ここに遺物の詳細を報告してその位置づけを考えてみたい。

まず音谷池遺跡について簡単に振り返ってみたい。本遺跡が所在する高松平野の南部には千疋台地と呼ばれる台地が形成され、ここでは北に流れる大小の河川によって開析が進み、北に開かれる谷状地形と丘陵群が広がっている。音谷池遺跡もこうした丘陵群の一部で、ここから北側には高松平野西部を望み、南東側から南西側にかけては同様な丘陵群があり、急峻な山地などは周辺に控えていない。音谷池の水系は高松市西部で瀬戸内へ注ぐ本津川支流であり、海岸線までの



第1図 遺物採集地

直線距離は約15kmで、現地の標高は約110mを測る。

また、周辺の丘陵地帯には弥生時代の遺物散布地や古墳時代の窯跡群が点在し、音谷池では音谷池東岸および西岸に窯跡群が知られている（北山・國木 1993、松本・若橋 1985）。現在のところ、後期旧石器時代から縄文時代の遺跡は確認されていない。サヌカイト原産地である国分台や金山からは直線距離で約10km程である。

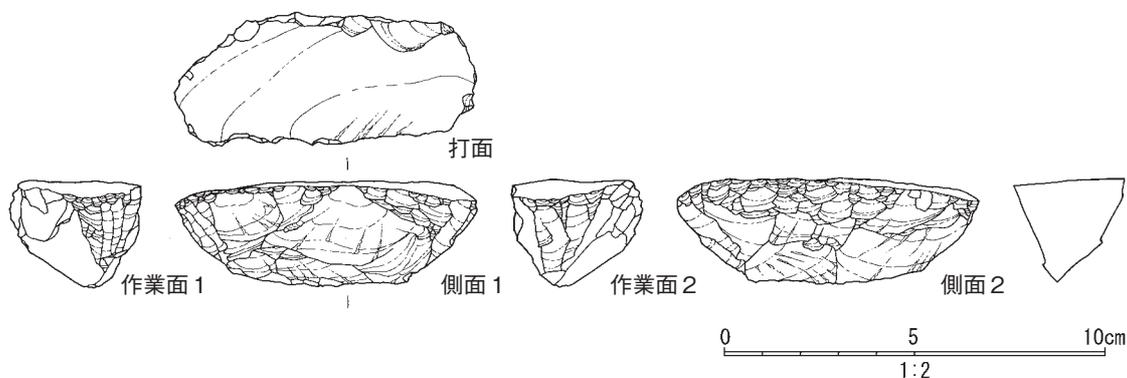
2 石器の観察

細石核（第2図）

細石核は厚手の剥片を素材とし、その主要剥離面を打面としたものである。細石刃剥離作業面は長軸の両端に設定され（作業面1・2）、作業面1では細石刃を剥離した痕跡が3条、作業面2でも3条残されている。側面1の側面調整は打面側からおこなわれており、同様に側面2でも上方からの側面調整が認められる。両側部ともに側面調整は比較的大まかなもので、打面に接する部分では細かな調整が残されている。本体の横断面形は逆三角形状となり、本体の底面は形成されていない。また、下方からの下縁調整や横位方向からの体部調整も確認できない。打面部はポジティブな単剥離打面となっており、側面2に接する部分に剥離痕が残されている。この剥離痕は細石刃剥離作業面に接していないことから、細石刃剥離に伴う打面調整とは考えにくく、むしろ船野型細石核で頻繁に認められる本体固定の痕跡（橋 1981）と考えた方が自然であろう。

石材には風化面が黄灰色のサヌカイトが用いられ、最大長2.8cm、最大幅3.5cm、最大厚7.9cm、重量79.39gを測る。

なお、船野技法は素材の使い方によって船野型細石核と上下田型細石核に細分されているが、本資料は素材時の分割面または主要剥離面を打面に設定することから、船野型細石核として分類できる（橋 1975・1989・1990ほか）。



第2図 音谷池遺跡の船野型細石核

3 船野技法の類例

九州から西日本にかけて分布する船野型細石核については、音谷池遺跡周辺でも認めることができる。周辺で最も数多く細石核の確認されている備讃瀬戸地域の香川県域では、10遺跡で約440点の細石核が確認されており、このうち船野技法による細石核は約20点（約4.8%）抽出できる（多田 2000）。ここでは船野技法による船野型細石核と上下田細石核が認められており、両者の点数比は約2：1で船野型細石核が多いようである。香川県以外の四国地域内では、西南四国から高知平野で船野技法による細石核が集中している。西南四国では愛媛県池ノ岡遺跡、同県深泥遺跡、高知県双海中駄場遺跡があるほか、高知平野では奥谷南遺跡が代表的な例であろう（木村 2003、多田2003）。西南四国の状況を見ると僅かに野岳・休場技法や羽佐島技法によるものが存在しているものの、船野技法による船野型細石核が目立つようで、在地で産出する頁岩が主要石材となっている。高知平野の奥谷南遺跡では約100点の細石核が出土しているが、ここでは野岳・休場技法、船野技法、羽佐島技法によるものが確認できる（松村・山本 2001）。野岳・休場技法と船野技法の点数比率は約3：1で野岳・休場技法が多く、石材は在地産出のチャートが主体で頁岩が僅かに用いられている。また、船野技法による細石核の型式では、船野型細石核と上下田細石核の二者が認められるようで、その多くは船野型細石核である。

以上のように四国地方の船野技法を概観すると、西南四国ではこの技法がまとまって確認できるようで、隣接する東九州との結びつきが想定できるだろう。また、遺跡数が問題となるが、高知平野でも船野技法の卓越性が考えられ、東九州に隣接する西南四国から太平洋沿岸を含めた四国の南部に船野技法の密な分布域を設定できよう。さらに四国の船野技法についてその利用石材をみると、基本的に在地の主体的石材を使用している。例えば備讃瀬戸ではハリ質安山岩、太平洋沿岸ではチャート、西南四国では頁岩といったように、各地域で最も使用頻度の高い石材が使用されている。音谷池遺跡例のようなサヌカイト利用も一面では在地石材利用の結果であるといえるが、本地域における細石刃文化段階のサヌカイト利用は全体の約1割程度で、石材選択という点からは少数派としてよいだろう。

4 評価

音谷池遺跡の所在する香川県では船野技法による細石刃文化関連資料が少ないものの、東九州に卓越した細石刃生産技術の足跡を確認したことで、今後は本地域における細石刃文化の成立と展開により複雑な解釈が迫られることになる可能性も生じた。しかし、先述したようにこの資料で重視すべき点は、本地域の細石刃・細石核で使用頻度の少ないサヌカイトが用いられていることである。

ここで本地域における細石刃文化段階のサヌカイト利用について簡単に振り返っておきたい。備讃瀬戸地域で比較的まとまった出土点数を数える羽佐島遺跡、花見山遺跡、大浦遺跡では、362点の細石核が確認されている（多田 2001）。これらの石材別点数比は、ハリ質安山岩319点（88.1%）、サヌカイト33点（9.1%）、流紋岩5点（1.4%）、黒曜石4点（1.1%）、水晶1点（0.3%）となっており、サヌカイトの石材利用は約1割程度である。このサヌカイト利用につい

ては羽佐島 I 型細石核に使用頻度が高く、細石刃文化に先行する時期の石材利用が影響した可能性を考えたことがある（多田 2001）。この点から考えれば、音谷池遺跡の船野型細石核についても細石刃文化段階の古い段階に残された可能性を考慮できるだろう。

本稿の執筆にあたって、徳安正道氏と森下英治氏より情報収集などでご協力をいただいた。さらに本資料の採集者である金澤芳廣氏からは、資料公開にあたってのご快諾をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

(2007年 3月31日)

参考文献

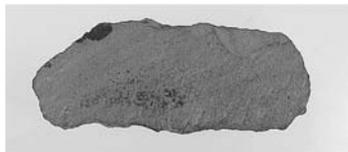
- 北山健一郎・國木健司1993『埋蔵文化財試掘調査報告VI』香川県教育委員会
- 木村剛朗2003『南四国の後期旧石器文化研究』幡多理文研
- 多田 仁2000「基調報告 4 中・四国地方における細石刃文化の様相」『第17回中・四国旧石器文化談話会発表要旨』中・四国旧石器文化談話会
- 多田 仁2001「羽佐島技法の再評価」『旧石器考古学』62、旧石器文化談話会
- 多田 仁2003「四国・瀬戸内海地域の細石刃文化」『シンポジウム日本の細石刃文化』I、八ヶ岳旧石器グループ
- 橋 昌信1975「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』3、別府大学
- 橋 昌信1979「東九州における細石核」『考古学ジャーナル』167、ニュー・サイエンス社
- 橋 昌信1981「4 上下田遺跡の細石器文化」『大分県上下田遺跡』別府大学附属博物館
- 橋 昌信1989「船野型細石核のバリエーション」『おおいた考古』2、大分県考古学会
- 橋 昌信1990「船野技法についての一考察」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集刊行会
- 松村信博・山本純代2001『奥谷南遺跡III』高知県埋蔵文化財センター
- 松本敏三・若橋 孝1985「香川県古代窯業遺跡分布調査報告II」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』II、瀬戸内海歴史民俗資料館
- 渡部明夫1982「IV羽佐島遺跡の遺物整理」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（V）』香川県教育委員会



遺跡遠景(南東より)



遺跡遠景(北東より)



打面



作業面 1



側面 1



作業面 2



側面 2

音谷池遺跡の船野型細石核

愛媛県出土埴輪の基礎的研究（7）

—松山平野における中期古墳の埴輪について—

山内英樹

1 はじめに

松山平野における古墳時代後期の埴輪生産およびその展開については、これまで中型前方後円墳の出現や生産遺構である須恵器・埴輪併焼窯の存在などから論じたことがあるが（山内 2000・2001a・2004）、6世紀初頭における円筒埴輪の大型化や基底部倒立調整の顕在化、さらには一古墳における複数型式の埴輪樹立など、伊予における埴輪の画期をもとに、その時期細分も可能であるという見通しを持つことができた（山内 2006a）。しかし課題点も多い。その一つに後期初頭から遡る前段階の埴輪資料に乏しく、古墳時代中期の埴輪の展開や、その後の小規模古墳への埴輪樹立の意義などについて考察することが困難である点が挙げられる。これは平地部における同時期の古墳の確認に乏しく、東四国で認められる中期大型古墳（前方後円墳・円墳）の存在が把握不十分な現状が、その研究を停滞させる一因になっているものと考えられる。

今回報告する観音山古墳・桜山古墳は、いずれも松山平野では中・大型円墳とされる中期古墳であり、遺跡発行会による地道な現地踏査および測量調査により、ある程度の基礎データが提示されている（遺跡発行会 2001・2005）。また、現地調査にて採集した埴輪についても報告されており、いずれも古墳時代中期における松山平野では数少ない埴輪資料であると思われることから、改めて両古墳の評価を埴輪資料から若干ではあるが論じることとする。また、同平野における中期から後期前葉における埴輪の展開についても、旧稿（山内 2006a）の発表を骨子にしながから見通しを述べさせて頂くことにしたい。

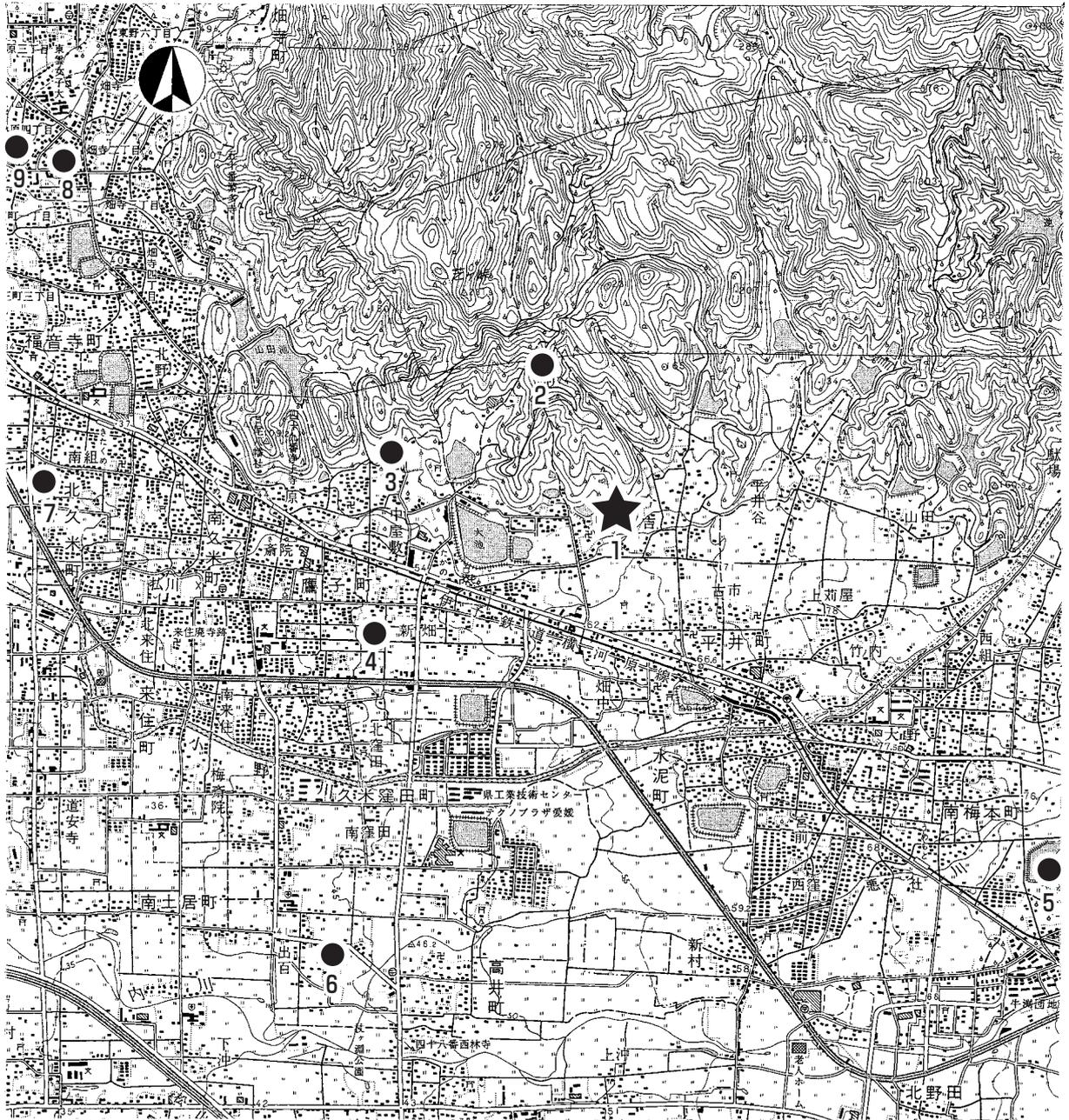
2 松山市・観音山古墳の埴輪資料

(1) 立地と出土契機

松山市・観音山古墳は、松山平野北東部の丘陵先端部に位置しており、頂部の標高は92mを測る。周辺には埴輪片の確認されている素鷲神社古墳やタンチ山古墳、さらにその周囲を取り巻く形で二つ塚古墳、波賀部神社古墳、播磨塚天神山古墳などの後期前方後円墳が展開する。

本古墳については研究史も古く、柳原多美雄氏が盾形埴輪や短甲などの各種形象埴輪の存在を指摘されており（柳原 1929・1969）、墳丘についても墳長100m以上の帆立貝形古墳という見方もあったが、遺跡発行会の測量調査の結果、径64m、高さ9m以上の円墳であるとされている。埋葬主体は明らかではないが、本古墳出土と伝えられる内行花文鏡1面がある（名本 2005）。墳丘斜面および裾部と思われる地点には葺石と思われる石が石垣として転用されており、本来はかなり広範囲に葺かれていたものと推測される。

今回報告する埴輪資料は、これまでの測量調査および正岡陸夫・常盤茂両氏が現地踏査の際に



- | | | |
|-----------|-------------|------------|
| 1. 観音山古墳 | 2. 桧山峠7号墳 | 3. 五郎兵衛谷古墳 |
| 4. タンチ山古墳 | 5. 播磨塚天神山古墳 | 6. 波賀部神社古墳 |
| 7. 二つ塚古墳 | 8. 三島神社古墳 | 9. 経石山古墳 |

第1図 観音山古墳周辺の主要古墳 (S = 1 / 30,000)

採集した資料（常盤 1984・正岡 2004）に加え、筆者が現地踏査を実施した際に墳丘南西および西側裾部で表採した資料を報告するものである。なお、遺跡発行会が以前報告した埴輪資料については同発行会のご厚意により再実測を行い、今回あらためて報告することを付記しておく。

(2) 資料の観察

1 は復元値で口径45.2cmを測り、器壁1.5～1.8cmとかなり厚めの大型品であり、口縁端部外面には幅3.5cmの粘土帯を貼付するものである。粘土帯外面は比較的平坦で、下端の粘土接合痕は不明瞭ながら指オサエが列状に並ぶ。口縁端面はナデによりわずかな窪みを有するが、丁寧な仕上がりで平坦に近いものである。

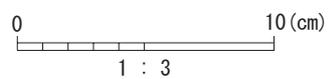
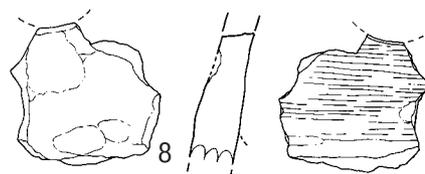
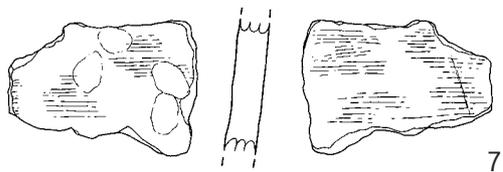
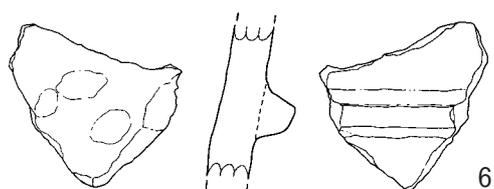
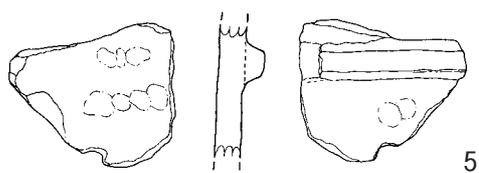
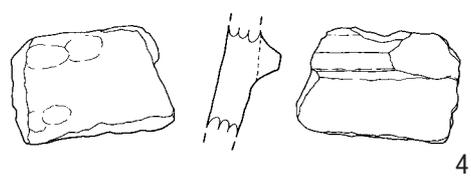
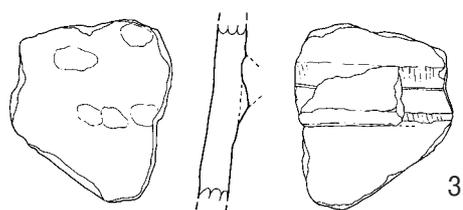
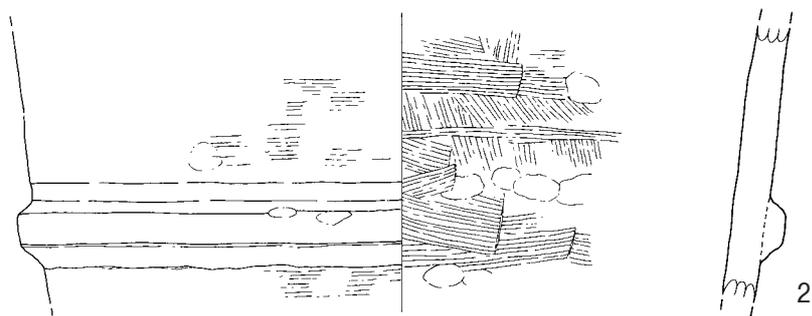
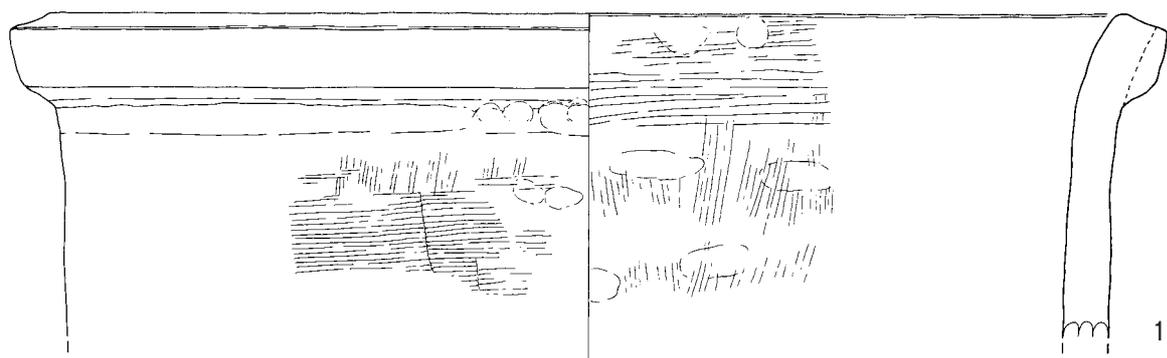
外面調整は1次調整に6本/cmのやや粗めのタテハケを施し、その後、2次調整に同様のハケ原体を用いてヨコハケ調整（B種ヨコハケ（一瀬 1988））を施したことが、不明瞭ながら縦方向に並ぶ静止痕の様子から判断できる。内面にもタテハケ調整のち、4本/cmとかなり粗めのヨコハケ調整が口縁端部内面に約4～5cm幅で認められる点は注意したい。外面にはわずかに残存する程度だが、内面には口縁端部より約8cm幅で赤色顔料の塗布が認められる。色調は明黄褐色を呈しつつ、やや白みを帯び、外面には黒斑も認められる。

2～6は突帯を有する胴部片である。2は突帯幅2.6cm、突帯高0.8cmを測り、やや磨耗が認められるが、断面台形を呈すると思われる。外面調整には6～7本/cmのヨコハケが施されるが、磨耗が激しいため静止痕の確認には至らなかった。内面には1次調整のタテハケの後、7～8本/cmの、やや細かな断続的なタテハケ調整が認められる。突帯内面付近には指オサエ列があり、突帯貼付時の痕跡と考えられる。

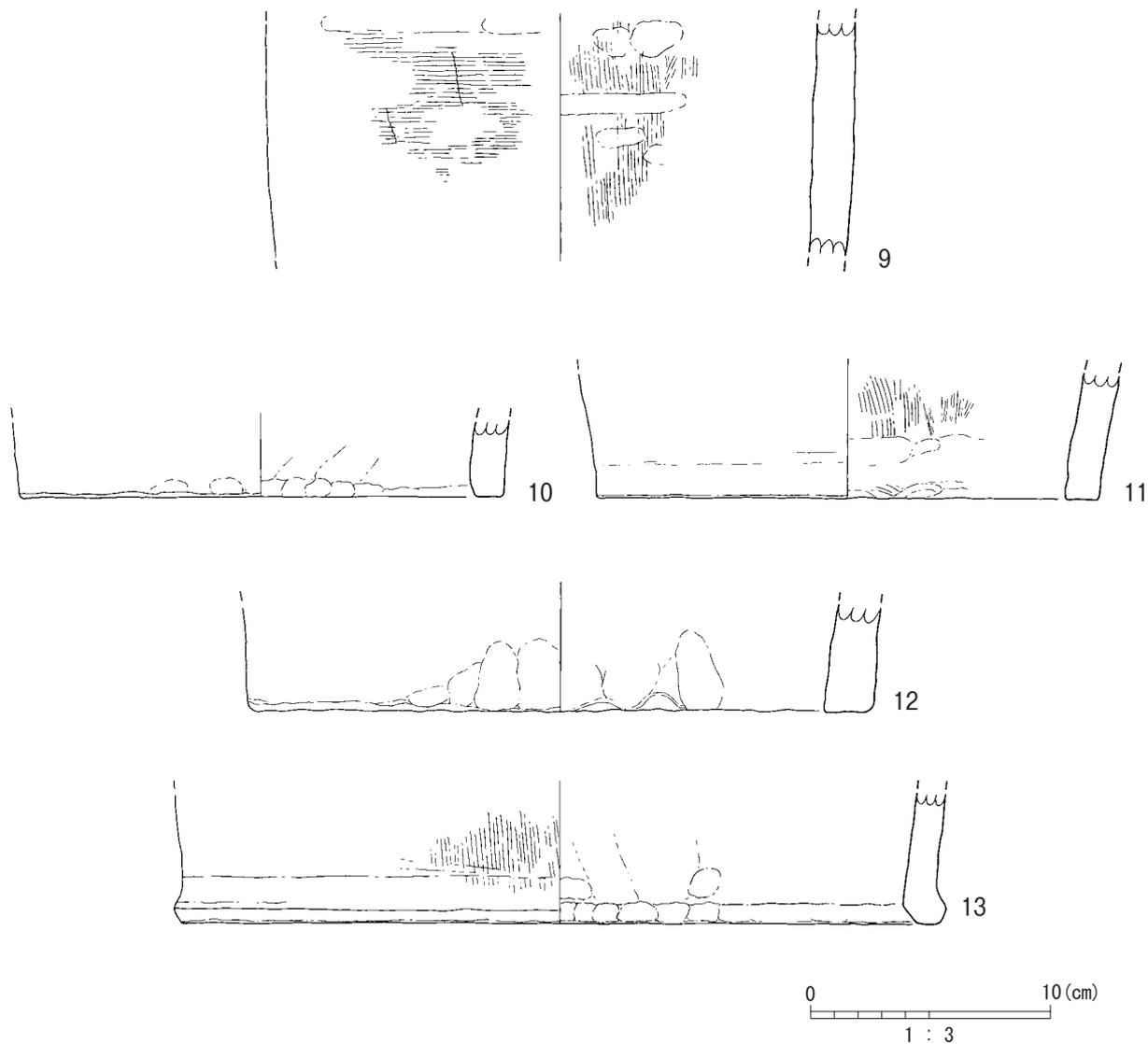
3は突帯が欠損もしくは剥離した個体である。剥離痕には1次調整時の7本/cmのタテおよびナメハケが認められる。また、剥離痕中央部には横方向の沈線状の窪みがあることから、本来は突帯設定の際に目安としている可能性が高いものと考えられる。

4～6は多少の相違は認められるものの、突帯断面は台形を呈する。4・5は突帯端面が平坦で幅1.7cm、突帯高0.8～1.0cmを測り、5には赤色顔料の塗布が認められる。器壁は1.1cm前後である。6は幅2.3cm、突帯高1.3cmを測り、上端がやや突出する形状である。器壁も1.6cmと4・5と比較して厚みがあり、赤色顔料の塗布や黒斑も認められることから、1の大型品と同種類の個体である可能性が想定できる。

7～9は突帯の見られない胴部片である。7は内外面ともに6～7本/cmのヨコハケが認められ、外面には斜め方向に静止痕が認められることより、B種ヨコハケであると考えられる。内面には強い指オサエが不規則に並ぶ。8は器壁が1.3～1.8cmと幅を持つが厚めである。一部には突帯の剥離痕と思われる箇所も見られる。外面には6～7本/cmのヨコハケが認められ、赤色顔料も塗布される。また、スカシ孔が部分的に残り、その形状より本来は円形を呈していた可能性が極めて高い。本資料も1・6と同様の種類に属するものと考えられる。9は外面に6本/cmのヨコハケが認められる。静止痕もわずかながら認められることより、B種ヨコハケである可能性が高い。内面には外面と同様のハケ原体を用いたと考えられるタテハケ調整が施され、指オサエ・ナデが顕著に残る。器壁が1.8cm前後と厚く、赤色顔料は微量ながら塗布される。



第2図 観音山古墳・埴輪 (1)



第3図 観音山古墳・埴輪（2）

10～13は基底部である。10は底径の復元値20.0cm、器壁は1.4cmを測る。指オサエ、ナデにより端部を調整しており、自重による潰れは見られない。おそらく成形途中の段階で「基底部正立調整」（山内 2003a・2003b）を行ったものと考えられる。11は底径22.0cmを測り、内面に7本/cmのタテハケおよび指オサエ・ナデが施される。底端部の潰れはなく、10と同様の基底部調整である。12は底径の復元値25.8cmを測り、器壁1.8～2.0cmとかなり厚めの個体である。底端部は指オサエにより自重の潰れを消している。13は底径の復元値31.6cmを測り、外面に7本/cmのタテハケが施される。底端部は外側に大きく潰れた後、外面に指ナデを行うことで面を形成し、内面は指オサエの連続で潰れを消している様子が窺える。外面には赤色顔料が塗布される。

(3) 資料の評価

埴輪自体が小片であるため、その全体形を復元することは困難であるが、幾つかの情報は得ることができた。そこで、以下に形態・調整などの諸特徴をまとめることにする。

まず器種については、今回の観察では円筒埴輪のみの確認であった。柳原氏が触れた盾形・短甲形埴輪の存在については不明と言わざるを得ないが、円筒埴輪の中に、口縁部端部外面に粘土帯を貼付した個体が含まれている点は注目したい。器壁が非常に厚く、口径40cmを超える大型品であり、赤色顔料の塗布やB種ヨコハケの採用など、近畿地方（古市古墳群など）の中期古墳で多く認められる特徴を有していると言える。また、県内での「口縁部粘土帯突帯」は、樹之本古墳（山内2001b）、播磨塚天神山古墳（吉岡2001）、土壇原V遺跡が挙げられるが、本古墳資料は突帯貼付や調整が比較的丁寧で、上記の事例よりやや古相を呈するものと考えられる。

器面調整には主にB種ヨコハケを採用している。突帯間を知る資料に乏しいため、判断に苦むが、一瀬和夫氏の詳細な分析（一瀬1988）に照らし合わせると、「Bb種もしくはBc種」に該当するものと想定される。スカシ孔も確認出来たのは円形のみで、突帯も高さの差異はあるものの、断面台形を呈するなど、一定の規格性を有している。基底部についても丁寧なナデ・オサエ調整で端部の潰れを消しているが、13のように端部が外反気味になる個体もあり注目される。

以上のことから、本古墳出土の円筒埴輪には、二つのタイプが存在するようである。

① 口縁部外面に粘土帯を有する大型品で、器壁が厚く、突帯断面がやや高めな台形を呈する。

赤色顔料の塗布が顕著に認められ、基底部は自重でやや外反するものもある（Ⅰ類）。

② 突帯幅および高さにやや乏しく、器壁が1cm強と①に比べて薄手である個体。基底部の自重はナデおよび指オサエにより丁寧に消され、外傾しながらも直線的である（Ⅱ類）。

また、黒斑の存在および色調・焼成具合から、少なくとも窖窯焼成ではない製品と考えられる。

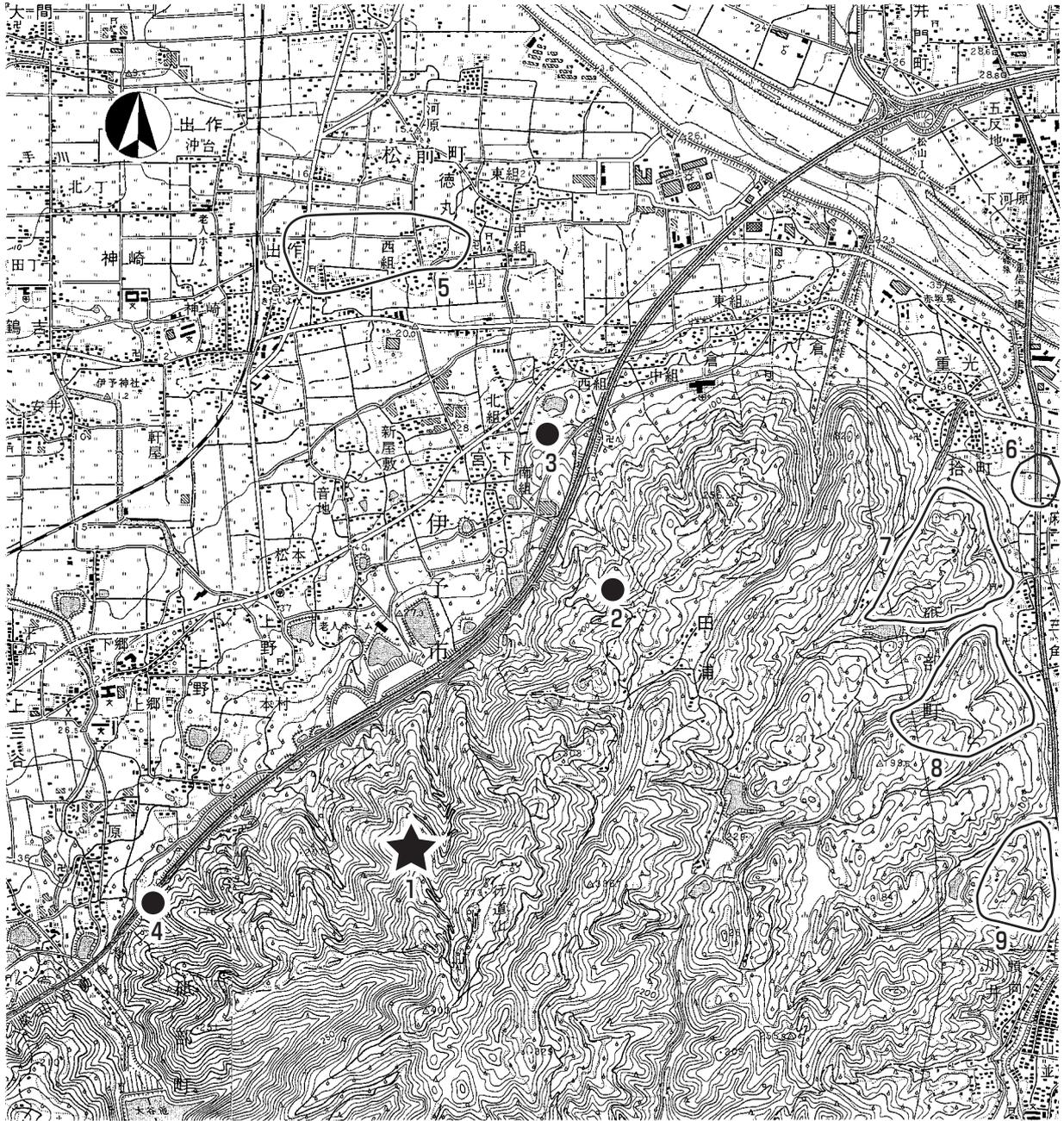
以上のことから、本古墳出土埴輪の年代的位置付けを試みると、川西編年でいうⅢ期後半段階、およそ5世紀前葉から中葉を想定しておきたい¹⁾。時期的には小竹9号墳（山内2003c）が近接しているが、時間的な前後関係については現段階では判断しづらい。

3 伊予市・桜山古墳の埴輪資料

(1) 立地と出土契機

伊予市・桜山古墳は、松山平野南部に所在する行道山（標高403m）から北に延びる丘陵尾根上に位置しており、頂部の標高は約300mを測る高所である。周辺の丘陵部では方格四獣文鏡や筒形銅器、紡錘車形石製品などの出土が知られる吹上の森1号墳や、主体部の箱式石棺から豊富な鉄製品が副葬された猪の窪古墳などが所在する。

本古墳については、相田則美氏が径約40mの帆立貝形古墳と紹介しており、円筒・朝顔形埴輪のほか、家・短甲・盾・蓋などの各種形象埴輪が出土しているとの報告がある（相田1980）。それに対し、正岡陸夫氏は円墳との見解を示し（正岡1981）、墳丘測量の必要性を指摘している。遺跡発行会の測量調査の結果、南北38m、東西35mで楕円形を呈し、高さ4.5～7mを測る古墳であるとされている（遺跡発行会2001）。埋葬主体は明らかではないが、墳丘北および東西の平



- | | | |
|------------|-------------------|------------|
| 1. 桜山古墳 | 2. 猪の窪1号墳 (猪の窪古墳) | 3. 吹上の森1号墳 |
| 4. 猿ヶ谷2号墳 | 5. 出作遺跡 | 6. 水満田古墳群 |
| 7. 水満田西古墳群 | 8. 三角古墳群 | 9. 城ノ向古墳群 |

第4図 桜山古墳周辺の主要古墳 (S = 1 / 30,000)

野部に面する地点では葺石の存在が確認されている。

今回報告する埴輪資料は、これまでの測量調査の際に採集した資料を報告するものである。なお、遺跡発行会が報告した埴輪資料については同発行会のご厚意により、観音山古墳と同様に再実測を行い、今回改めて報告することを付記しておく。

(2) 資料の観察

1は胴部片だが、横方向に走るナデ調整が突帯剥落痕の可能性も考えられる。外面には5本/cmのタテハケ、内面には同一原体によるナナメハケが施される。

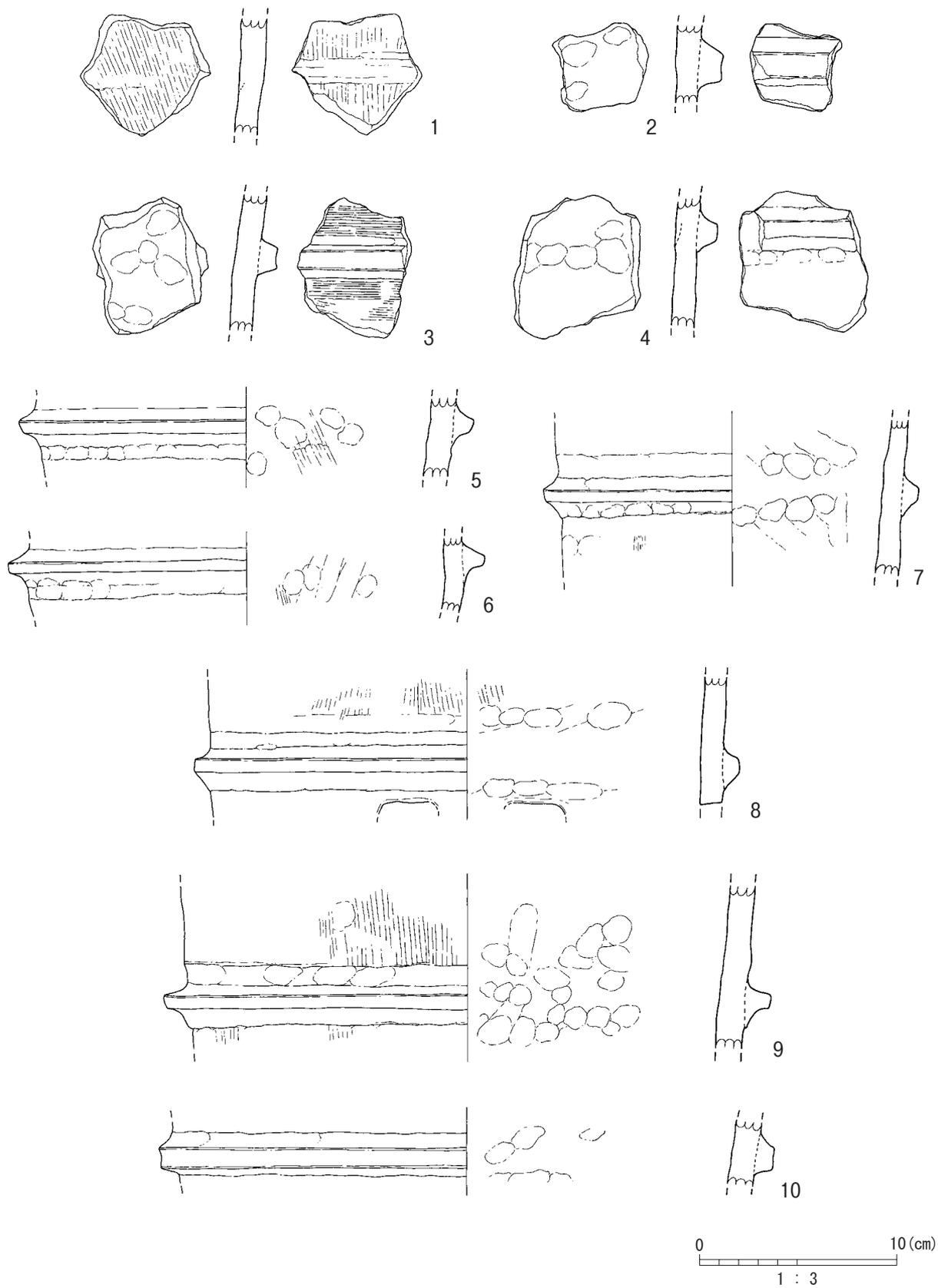
2～11は突帯を有する胴部片である。2は突帯幅2.5～2.8cmと幅広で、突帯高1.2cmである。突帯中央部はナデにより窪み、外面全体には赤色顔料が認められる。3は突帯幅2.0cm、突帯高0.9cmを測り、中央部は窪む。外面調整は10本/cmと細かく、突帯上にもヨコハケ調整が認められる。内面には指オサエが顕著である。4は突帯の一部が剥落しており、断面形は突帯高0.9cmを測る。突帯下部には貼付時の指オサエ列が認められる。

5～11は胴部径を復元した個体である。胴径は20～22cmのもの（5・6）と、25～30cmのもの（8～11）、18cm程度の小型品（7）に大別される。5・6は突帯断面が台形で、上端部がやや突出するタイプである。端面は窪まず平坦で、突帯下部には貼付時の指オサエ列が認められる。7は胴径が小さいことから、後述する盾形埴輪の円筒部である可能性が高い。突帯断面は台形を呈し、やや小型の突帯である。器壁も1.0cm前後と薄く、外面には赤色顔料が残る。

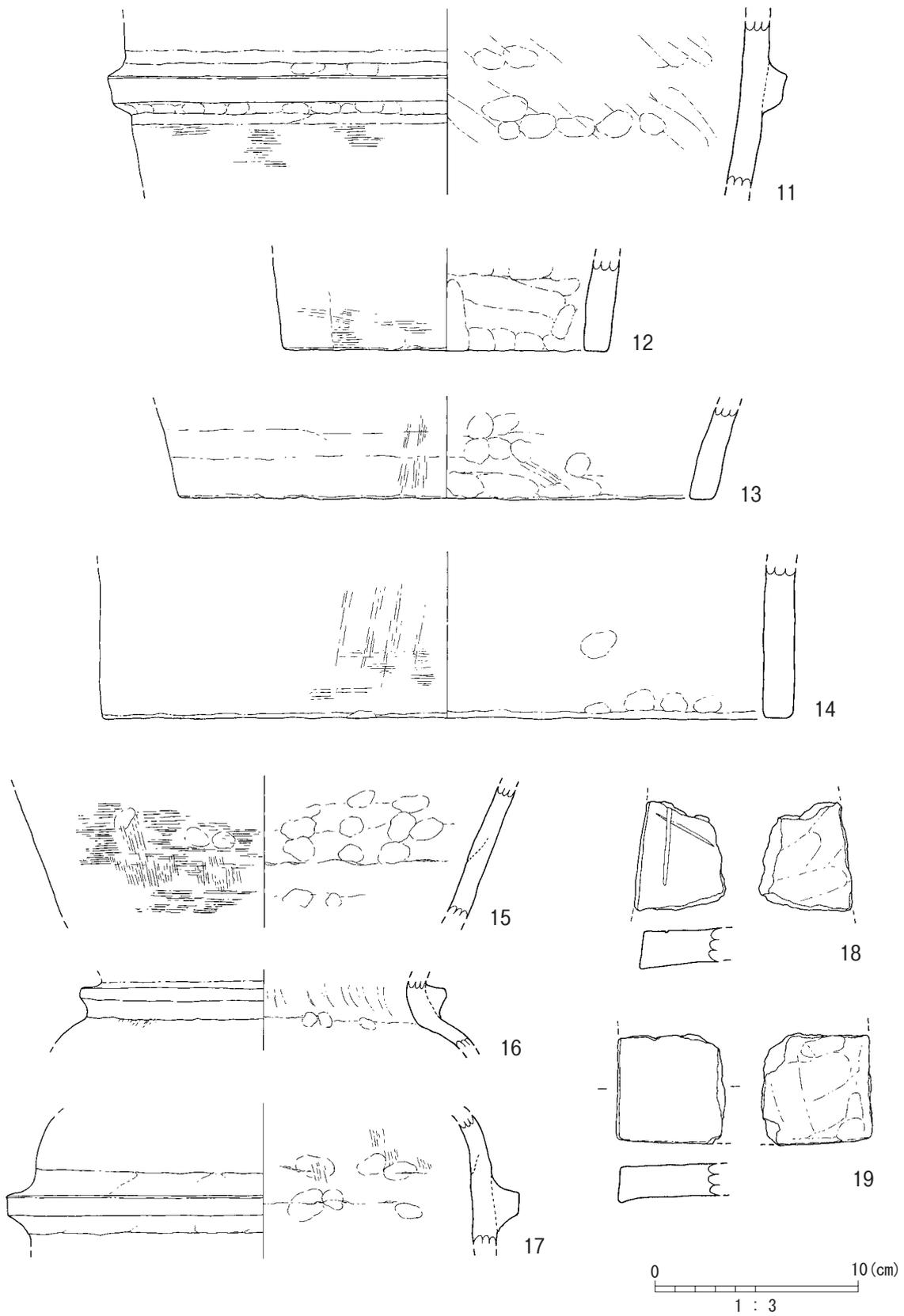
8は内外面に5本/cmのやや粗めのタテハケが施される。突帯は磨耗が見られるが、本来は5・6と類似していたと思われる。突帯下部には隅丸方形のスカシ孔が穿たれる。9は突帯高1.4cmを測り、端部がやや尖り気味である。突帯下端には粘土帯の貼付痕が顕著に残り、赤色顔料の塗布も認められる。外面には5～6本/cmのタテハケ調整が施され、内面には突帯付近に指オサエが並ぶ。10・11は突帯幅2.0～2.5cmと幅広で、中央部がナデにより窪む形状を呈する。11の外面には7～8本/cmの細かなヨコハケ調整、内面にはナナメナデが認められる。

12～14は基底部である。12は底径の復元値16.0cmを測る小型品で、7に対応して盾形埴輪の基底部となる可能性がある。外面には7～8本/cmの細かいヨコハケ調整が施されるほか、板オサエの可能性のある面を有する。底端部は指オサエ・ナデにより自重の潰れを消している。13は底径26.4cm、14は33.6cmと差異が認められるが、これは先述した胴径と同様に、規格による差異と捉えることが可能である。底端部の潰れは細かなハケおよび指オサエにより消され、端部は断面方形を呈する。基底部が直線的で外反するものはない。14には黒斑が認められる。

15～17は朝顔形埴輪と考えられる。15は器壁が0.9cmとやや薄く、直線的に外傾することから頸部上半の破片と判断した。外面には8本/cmと細かなハケ調整がヨコ・ナナメ方向に施され、赤色顔料が塗布される。内面には指オサエが列状に見られ、粘土紐接合痕も残る。16は屈曲部であり、断面三角形でやや丸みを帯びた突帯が貼付される。わずかにハケ痕が残り、外面には赤色顔料が認められる。頸部との接合部付近にはシボリ痕が認められる。17は肩部から突帯にかけての個体である。肩部はやや張るが、器壁が若干薄くなり短めな印象を持つ。突帯は断面台形で、突帯幅2.3cm、突帯高1.4cmと厚みと高さを有する。内面には粘土紐接合痕が顕著に残る。



第5図 桜山古墳・埴輪(1)



第6図 桜山古墳・埴輪（2）

18・19は平坦で端部が直線的な点より、盾形埴輪の破片と思われる。18は盾表面と考えられる部分に線刻が認められる。側面に平行して見られることより、杵線を表現した可能性が高い。また、杵線に切られた線刻は、三角文などの外区を飾る文様と考えた。器壁も1.7～1.8cmで丁寧な仕上がりである。表面はやや黒ずむが、おそらく顔料が塗布されたものと想定する。19は隅角が確認できる個体である。器壁および調整は18と同様、丁寧な仕上がりである。

(3) 資料の評価

今回の整理で、これまで相田氏が触れていた円筒埴輪・朝顔形埴輪・盾形埴輪の存在を確認することが出来た。しかし、細片で個体の全容を知るには至らないため、不明な部分の方が多い。以下では、抽出できた諸特徴をもとに、本古墳の大まかな位置付けを試みることにしたい。

胴部径および基底部径、さらに突帯形状、赤色顔料の有無などから、本古墳の円筒埴輪を幾つかに分類すると、以下の2つに大別できる。

- ① 胴部径20～22cmで突帯は断面台形（幅・高さともにやや小型）を呈するもの（Ⅰ類）。
- ② 胴部径25～30cmで突帯は断面台形ではあるが、貼付幅が広く中央が窪むものや、高めの突帯を有することがある。ハケ調整が目立ち、赤色顔料も塗布される場合あり（Ⅱ類）。

また、3のような細かなヨコハケを施し、突帯断面も小型で中央に窪みを有する一群もあり、新たな類型として設定可能ではあるが、詳細は現段階では不明である。

また、器面ハケ調整であるが、タテハケ調整のみの個体のほか、細かなヨコハケが認められる個体がある。後者は静止痕の確認に至らないことから、積極的にB種ヨコハケとすることは現段階では出来ないが、3の外面に認められるヨコハケはその可能性がある。

朝顔形埴輪については、口縁部および二重口縁の成形手法と判別できる個体が確認出来ないが、おそらく屈曲部に断面三角形の突帯を貼付し、肩部は短く張る形状と推定される。これは器壁の厚さや調整に相違はあるが、小竹9号墳の資料と共通する部分もある。

盾形埴輪は文様帯が顕著ではないが、器面調整が丁寧でシャープな作りである。さらに円筒埴輪とは異なり、胎土自体も砂礫の混じりが少ない点も特徴的である。このことは、円筒埴輪と類似した焼成・胎土で製作される小竹8・9号墳や樹之本古墳の盾形埴輪とは大きく異なり、形象埴輪の製作工人与円筒・朝顔形埴輪のそれとは別集団であった可能性が想定できる。

以上の検討から本古墳の埴輪資料は、古墳時代中期前葉を前後する時期、つまり川西Ⅱ期もしくはⅢ期を想定したい。ただし、今後B種ヨコハケの資料および円筒および朝顔形埴輪の口縁部片が確認されれば、更に比較検討が可能となるものと考ええる。

4 松山平野での埴輪の変遷過程 —中期から後期前葉にかけて—

本稿で取り上げた観音山古墳・桜山古墳は、古墳時代中期前葉から中葉にかけて築造された地域有力者層の墳墓であると考えている。中・大型円墳という墳形や規模のみならず、埴輪を樹立するという行為自体に、同時期の特徴を色濃く見ることが出来る。では、本古墳が築造された後の埴輪樹立および生産の展開については、どのように捉えることができるのだろうか。ここでは松山平野北部・東部・南部について概観することとする。

(1) 松山平野北部

古墳時代中期前葉から中葉にかけての埴輪資料が今のところ確認できない地域である。この点は、①同時期の地域首長墳に埴輪の採用がなされなかった、②首長墳自体が欠落している、の二つの可能性が想定されるが、埴輪の役割のみで首長墳の存在を確定することは出来ないため、上記に対する明確な回答ができない。当該時期の良好な資料を待つて再検討を試みたい。

その後、中期末葉から後期初頭にかけて、埴輪は中・小規模の群集墳および首長墳に採用される。その事例として船ヶ谷向山古墳（池田・宮崎 1989、山内 2001b）、鶴が峠古墳群（西川ほか 2001）、大池東古墳群（高尾ほか 1998）、斎院茶臼山古墳（西尾 1983）などが挙げられよう。円筒埴輪は幾つかの型式に分類でき、器面調整および突帯形状の諸特徴がそれに対応する。また、各種形象埴輪も多種にわたり、やや小型ながら一古墳に複数の形象埴輪が樹立される。

このように、松山平野北部では中期末葉から後期初頭にかけて形象埴輪を伴う埴輪樹立が目立つものの、後期前葉（6世紀前葉）になると、埴輪を伴う古墳が確認出来ない点は注目したい。未確認の可能性もあるため確定的ではないが、同地域内で平野部に展開する広域首長墳と考えられる墳墓が存在しないため、という可能性もある。詳細は次章にて詳述する。

(2) 松山平野東部

古墳時代中期中葉には大型円墳である観音山古墳で円筒埴輪が採用されている。中には粘土帯を口縁外面に貼付する個体も認められ、複数型式の円筒埴輪が認められる。現段階では埴輪を採用する同時期の古墳は近接地には認められないが、今後確認される可能性もある。

その後、中期末葉から後期初頭にかけては、東野お茶屋台古墳群中で埴輪が採用される（阪本 1979、梅木 2002、吉岡 2006）。松山平野北部と同様、円筒埴輪は幾つかの型式に分類することが可能で、前代の属性を残すやや大型の個体と、簡略化された小型品が一古墳内に共伴する事例が見て取れる。形象埴輪は盾形埴輪が多い印象を持つ。

本地域における最大の特徴は、後期前葉（6世紀前葉）の段階で中・大型前方後円墳などの広域首長墳とされている古墳に埴輪樹立が認められる点である。三島神社古墳（森ほか1972、山内 2001b）、二つ塚古墳（山内 2003c）、播磨塚天神山古墳（吉岡2001）、波賀部神社古墳などがそれに該当し、墳形不明ながらタンチ山古墳にも同様に埴輪が認められる。対照的に中・小規模の群集墳に採用されることは少なく、極めて特徴的な現象とも受け取れる。

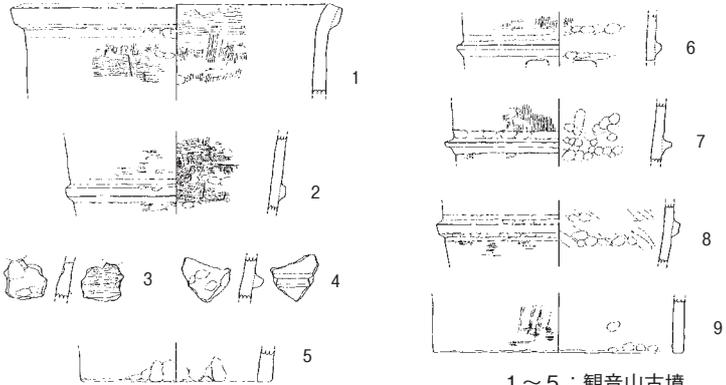
(3) 松山平野南部

中期前葉と考えられる桜山古墳に円筒埴輪および盾形埴輪が確認されるが、その後、中期後葉から後期初頭にかけて埴輪資料が非常に少ない点は注意を要する。砥部川右岸の丘陵上に展開する砥部窯跡群では、6世紀前葉には須恵器併焼窯の存在（谷田1・2号窯ほか）が明らかであり（阪本 1981、山内 2000）、松山平野東部の中・大型前方後円墳などへの供給が十分考えられる²⁾。なお、今回は詳細について触れないが、6世紀中葉から後葉にかけては、須恵質焼成で基底調整の顕著な資料が周辺古墳群で多く確認されることから、同一エリアでの埴輪生産地と供給先との関係を窺い知ることができる。

中期前葉～中葉

【山内編年Ⅱ・Ⅲ期】

- ・ B種ヨコハケの出現
- ・ 赤色顔料の塗布（円筒）
- ・ 器壁厚く、大型品あり



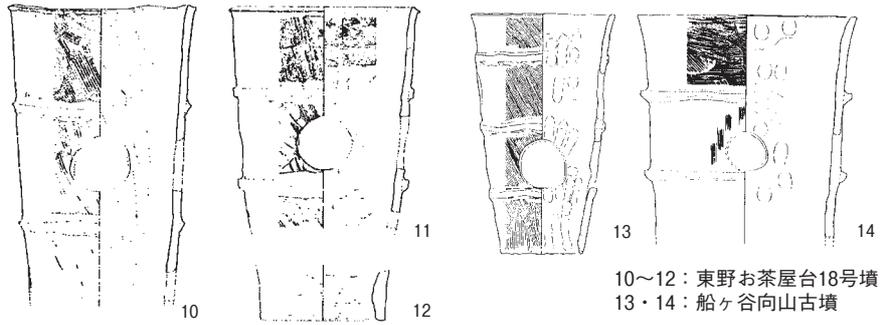
1～5：観音山古墳
6～9：桜山古墳

第1の画期

中期末葉～後期初頭

【山内編年Ⅳ-1期】

- ・ 複数タイプに分化
（法量の大小あり）
- ・ 製作技法の省略化
- ・ 古い技法の部分的残余



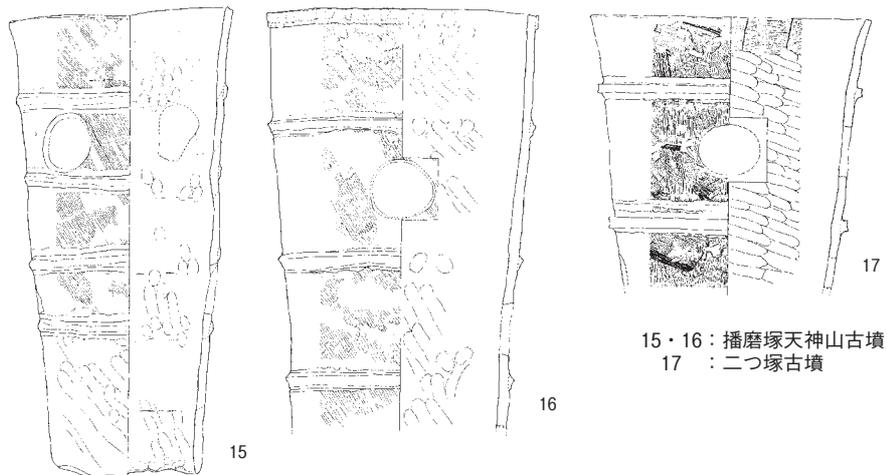
10～12：東野お茶屋台18号墳
13・14：船ヶ谷向山古墳

第2の画期

後期前葉

【山内編年Ⅳ-2期】

- ・ 埴輪の大型化
- ・ 基底部倒立調整の顕在化
- ・ 基底部の伸長化
（部分的）



15・16：播磨塚天神山古墳
17：二つ塚古墳

0 20 (cm)
1 : 10

第7図 松山平野における中期～後期前葉の埴輪変遷

5 埴輪受容の背景

前章の松山平野内における埴輪展開については、各地域内で埴輪の盛行期に時間的相違を認めることが可能である。では、その相違は如何なる歴史的背景が関係しているのであろうか。最後に、その画期について若干触れておきたい。

古墳時代中期前葉から中葉に大型円墳で確認される埴輪資料については、その形態および技法的特徴から判断して、在地の土師器生産技術などから共通性を抽出できるものではない。つまり、同時期の古墳および埴輪資料は、畿内中枢部との強い結びつきの中から創出されたもので、埴輪生産は極めて直接的かつ限定的なものであった可能性が高い。また、古墳時代前期から中期初頭にかけての同平野における古墳に埴輪祭式が採用されていない点も、広域首長墳の断絶という観点からも中期前葉から中葉の大型円墳の特異性をより強調している。

その後、中期末葉から後期初頭にかけて、広域首長墳と想定されるような大型円墳は姿を消し、畿内との直接的な技術的特徴を共有する埴輪も少なくなるが、中・小規模の群集墳の中に埴輪樹立の慣例は引き継がれる。ただし、この現象は現在までのところ松山平野北部・東部で確認されるもので、平野全域の共通項ではない。また、埴輪自体も全ての古墳ではなく、一部の古墳でのみ採用されるといった特徴を有する事実から判断して、埴輪祭式が墳墓の規模差（階層差）を必ずしも反映していないことを示していると考ええる。

円筒埴輪自体も幾つかのパターンに類型化され、法量も区別可能である。形象埴輪の樹立も目立ち、中・小規模古墳への供給が多いことから考えて、複数の集団が定期的に埴輪製作に携わった可能性が高い。その規範は前代の埴輪モデル（中期前葉から中葉の埴輪製作技法）かもしれないが、徐々に小地域色を抽出している点で、これを「第1の画期」（山内 2006b）としたい。この画期は筆者のいう「Ⅳ－1期」に該当するもので（山内 2006a）、中期的な埴輪生産とは異なる、新たな生産体制を垣間見ることが可能ではなからうか。

6世紀前葉になると、松山平野は更に大きな変革期を迎えることになる。つまり平野部を中心とした中・大型前方後円墳の出現である。特に松山平野東部で顕著に現れ、円筒埴輪をはじめとする埴輪樹立が確認されている点は、新たに出現する首長墳と無関係ではなさそうである。埴輪自体の特徴としては、これまでの在地的要素を残しつつ、埴輪自体が大型化し（中には断続ナデBなど製作手法上の特徴あり）、複数の形象埴輪（蓋・盾が多い）を伴うといった埴輪自体の組み合わせを認めることができる。群集墳などに同時期の埴輪があまり確認できないことから、埴輪が被葬者の階層性を大きく反映するものと捉えることが出来る。これが「第2の画期」であり、筆者のいう「Ⅳ－2期」に該当する。つまり、前方後円墳という墳丘形態が松山平野内で階層差を表出する大きな要素であり続けるためには、視覚的に墳丘を圍繞し圧倒する大型埴輪の存在もまた必要不可欠であったのではなからうか。平野部という立地条件であるならば、なおさら当時の一般民衆の視覚に訴える必要があったのかも知れない。

6 おわりに

本稿では、やや強引な感もあったが、古墳時代中期から後期前葉にかけての埴輪資料を検討し

てきた。特に古墳時代後期前葉の中・大型前方後円墳出現に伴う埴輪樹立の意義については、推測の域を出ないが、四国内において、同時期に前方後円墳の築造が集中的に認められる地域は他にはなく、松山平野の特異性を示す大きな要因であることに変わりはない。埴輪は古墳築造に伴う構築物の一つであり、古墳築造の年代を直接的に示すことの出来る考古資料であるという認識から、今回、古墳築造の背景に迫る際の重要な検討素材として、敢えて埴輪を選択した。

また近年は集落調査も進み、中期後葉から後期後葉にかけての同平野（特に東部）の集落変遷についても、幾らかの概観が出来るようになってきた。集落から古墳築造の実態を読み解く試みも、今後進めてゆく必要があるものとする。

最後になりましたが、本稿の執筆にあたり、遺跡発行会および常盤茂、山之内志郎の両氏には遺物実見から実測作業にわたりご配慮頂きました。末筆ながら感謝申し上げます。

（平成19年 3月23日）

註

- 1) 川西編年Ⅲ期とⅣ期を区別する最大の要素は黒斑の有無、つまり窖窯焼成が導入されているかどうかの判断である。しかし、初期須恵器の在地生産の開始にも時間的な偏差が認められるように、窖窯焼成の埴輪生産および技術導入についても時間のズレがあるものと考えられる。伊予（松山平野）の場合にも、5世紀前半期に無黒斑の埴輪が認められることは少なく、単純に川西編年を引用することはできない。
- 2) 土壇原Ⅴ遺跡出土の埴輪資料（埴輪棺か）と、播磨塚天神山古墳の埴輪資料が極めて共通した特徴を有しており、本来は砥部窯跡群および近接地で生産され、特定の首長墳に供給された可能性が考えられる。

参考文献

- 池田学・宮崎泰好1989「船ヶ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
遺跡発行会2001「伊予市桜山古墳について―墳丘測量報告を中心に―」『遺跡』第38号、遺跡発行会
遺跡発行会2005「松山市観音山古墳の墳丘測量報告」『遺跡』第42号、遺跡発行会
一瀬和夫1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要・Ⅴ』
大阪府教育委員会
梅木謙一2002『桑原地区の遺跡Ⅳ―桑原本郷遺跡・桑原遺跡・桑原小石原遺跡・東野お茶屋台遺跡1～3次』
財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
阪本安光1979『東野遺跡埋蔵文化財調査報告書』愛媛県教育委員会
阪本安光1981「谷田Ⅴ・Ⅵ遺跡」『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ、愛媛県教育委員会
相田則美1980「4・5世紀伊予の首長墓」『社会科』学研究』第1号、「社会科」学研究会
高尾和長ほか1998『大峰ヶ台遺跡Ⅱ―9次調査―』財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
常盤茂1984「北条平野と道後平野の埴輪」『遺跡』第26号、遺跡発行会
名本二六雄2005「伝観音山古墳出土内行花文鏡について」『遺跡』第42号、遺跡発行会
西尾幸則1983『斎院茶臼山古墳』松山市教育委員会

- 西川真美ほか2001『鶴が峠古墳群（L区）』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 正岡睦夫1981「愛媛県における前方後円墳の再検討」『遺跡』第20号、遺跡発行会
- 正岡睦夫2004「松山市観音山古墳の埴輪」『遺跡』第41号、遺跡発行会
- 森光晴ほか1972『三島神社古墳』松山市教育委員会
- 柳原多美雄1929「埴輪楯発見記」『伊予史談』60号、伊予史談会
- 柳原多美雄1969「中予地方の埴輪」『伊予史談』195号、伊予史談会
- 山内英樹2000「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（1）－谷田2号窯出土資料の再検討－」
『紀要愛媛』創刊号、（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹2001a「伊予における後期首長墳の動向－松山平野北部を中心とした様相について－」
『中国・四国前方後円墳研究会 第7回研究会・前方後円墳時代後期首長墳の動向』中国四国前方後円墳研究会
- 山内英樹2001b「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（2）－特徴的な形態・技法を有する埴輪について－」
『紀要愛媛』第2号、（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹2003a「埴輪研究の現状と課題－『基底部調整』をめぐる諸問題について－」『宮山古墳群の研究』
島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹2003b「円筒埴輪製作工程における『基底部調整』」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』
第52回埋蔵文化財研究集会
- 山内英樹2003c「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（3）－北条市浅海出土の埴輪について－」
『紀要愛媛』第3号、（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹2004「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（4）－松山市・二つ塚古墳資料紹介および県内資料の
製作手法観察－」『紀要愛媛』第4号（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹2006a「伊予における埴輪の一樣相」『考古学研究会岡山例会・11月例会発表』考古学研究会
- 山内英樹2006b「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（6）－今治平野の埴輪資料について－」
『紀要愛媛』第6号、（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 吉岡和哉2001『播磨塚天神山古墳』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 吉岡和哉2006『東野お茶屋台遺跡6次調査地』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

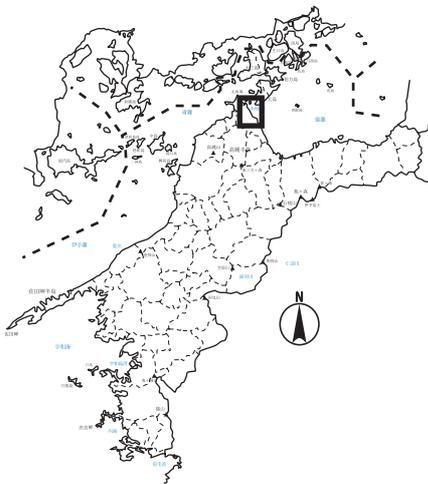
馬越遺跡出土の貿易陶磁器について

神石 都

1 はじめに

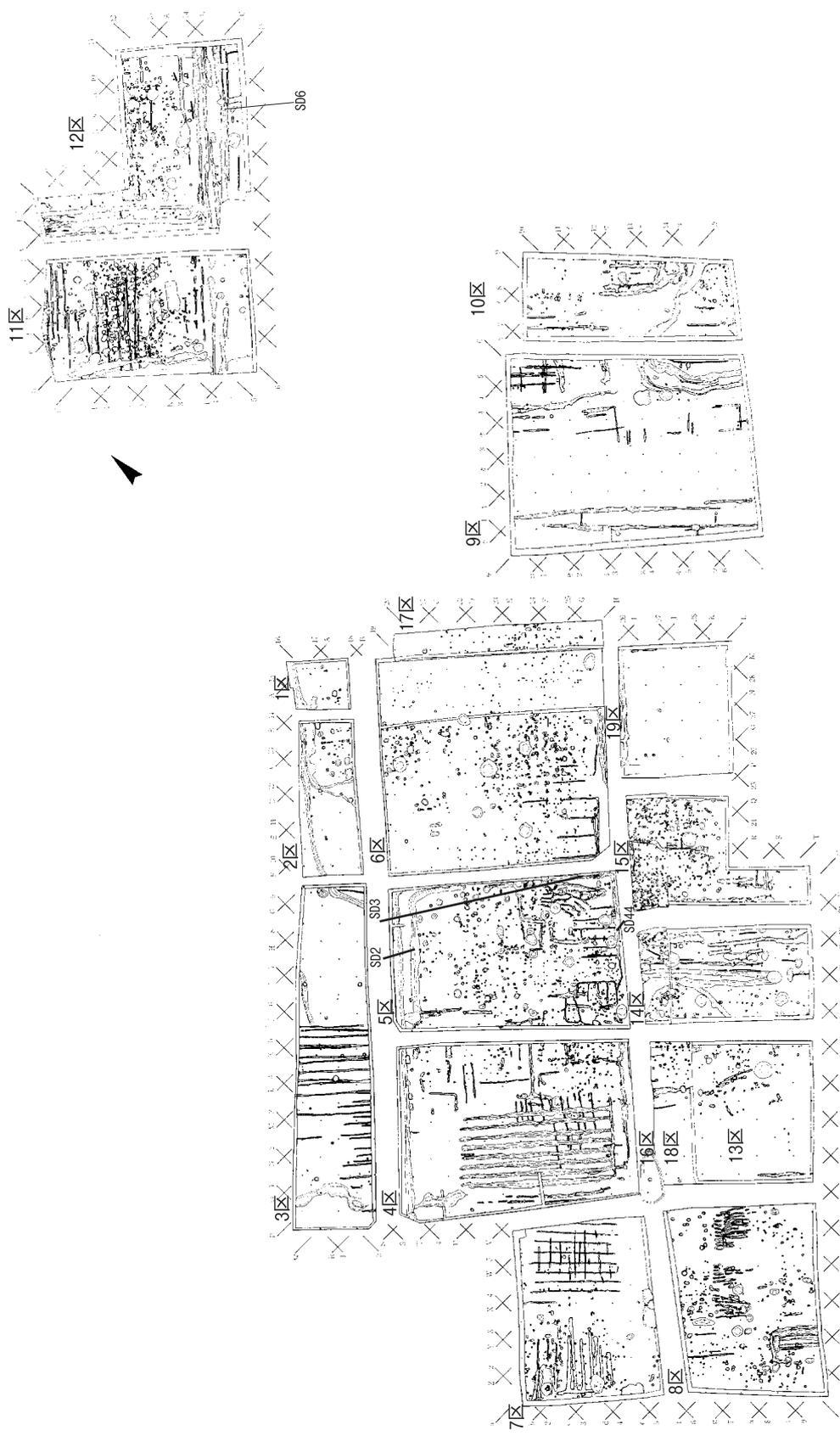
愛媛県今治市に所在している馬越遺跡は、1997年11月から1998年12月まで大型店舗建設計画に伴って発掘調査がおこなわれた。遺構・遺物の検討結果、概ね12～13世紀と14～15世紀の中世集落跡として位置付けられている(小野 2001)。近年では馬越地区の景観復元も試みられており成果をあげている(梅木・兵頭 2006)。本稿では、当遺跡内で出土した貿易陶磁器を取り上げ、遺物紹介と出土傾向について述べることを目的としたい。

- | | |
|------------|-------------|
| 1 馬越遺跡 | 16 阿方中屋II遺跡 |
| 2 馬越和多地遺跡 | 17 神宮太郎丸遺跡 |
| 3 片山内福間遺跡 | 18 小泉アツコ遺跡 |
| 4 八町1号遺跡 | 19 伊予国分寺跡 |
| 5 八町遺跡 | |
| 6 四村額ヶ内遺跡 | |
| 7 高橋湯ノ窪遺跡 | |
| 8 馬島ハゼヶ浦遺跡 | |
| 9 馬島亀ヶ浦遺跡 | |
| 10 糸大谷遺跡 | |
| 11 宮ノ谷遺跡 | |
| 12 正法寺遺跡 | |
| 13 石井国友遺跡 | |
| 14 阿方春岡遺跡 | |
| 15 阿方牛ノ江遺跡 | |



第1図 遺跡周辺図

(1:75000)



第2図 調査区全測図 (小野2001より修正・加筆)

2 遺跡概要

所在地である今治市は、愛媛県北部、高縄半島に位置しており、市内を流れる蒼社川と頓田川によって形成された沖積平野が広がっている(第1図)。今治市は古代においては、伊予国府・伊予国分寺・伊予国分尼寺が置かれた地であった。これらはいずれも、蒼社川右岸に所在した¹⁾(愛媛県史編さん委員会 1986)。遺跡は平野北部、蒼社川左岸から約1,000m、海拔9mの地点にある。発掘対象面積約19,000m²を、1～19区に設定して調査がおこなわれている(第2図)。遺構は、溝・自然流路441条、井戸24基、掘立柱建物27棟と土坑508基、柱穴3317基等が検出し、遺物は須恵器・土師器・瓦質土器・瓦器・貿易陶磁器のほか、石製品や鉄滓等出土している。調査区中央部4～6区に遺構・遺物が密集している。全体の遺構検出状況から、集落内の居住域と耕作地の位置関係についても検討されており、5区のSD2・3・44や12区のSD6は区画溝と考えられている。また周辺の調査においては、片山内福間遺跡や八町遺跡群などが中世集落として確認されている(岡田ほか 1984・大滝ほか 1989・中野ほか 1995)。

3 出土遺物

既に報告書に掲載されたものと今回の調査にて確認できたものを合わせて、総数は1,144点であった。種別では白磁800点、青磁317点、青白磁11点、黄釉2点、褐釉1点、青花5点、不明8点である。白磁が全体の69%、青磁27%であり、圧倒的に白磁優勢である。陶磁器の破片を分類する際には、『大宰府条坊跡 XV-陶磁器分類編』(宮崎 2000)、『概説 中世の土器・陶磁器』(中世土器研究会 1995)に準じておこない、第10表～第12表には基礎資料として全破片点数を示した。以下、分類別に出土点数をまとめる。

白磁は碗が638点である。大きな玉縁をもつ白磁碗Ⅳ類が189点で最も多く、数量的にはⅡ類→Ⅴ類→Ⅷ類とつづく。Ⅳ～Ⅷ類の範疇に含まれると判断できるものの、体部片や小破片のために明確に分類できないものが249点にもものぼっており、それらも含めるとⅣ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ類の合計は530点となる。これは白磁碗のうち83%を占める。碗・皿ともにⅨ類も若干数だが出土している。皿は97点で碗の1/6ほどであった。青磁についても、碗が271点で最も多い。このうち125点が龍泉窯系碗Ⅰ類である。器形はⅠ類と同様で外面に蓮弁文をもつⅡ類が62点と、同安窯系碗Ⅰ類が39点であり、これらも一定量出土している。皿については、ほとんどが同安窯系のもので、龍泉窯系皿は3点のみ確認できた。また、器種別では碗が総数の80%を占めるが、白磁袋物、青磁香炉・盤、青白磁合子など奢侈的要素をもつ遺物も出土している(第1表・第3図)。

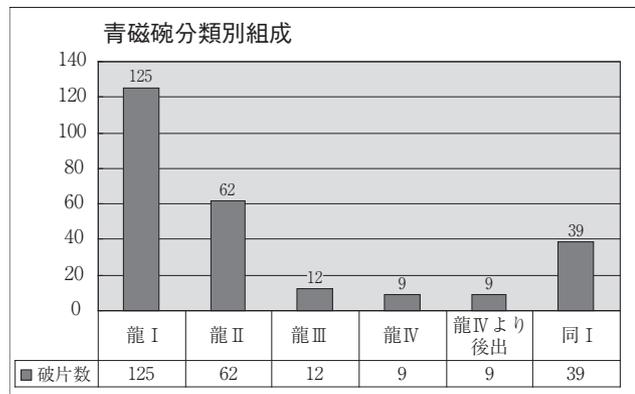
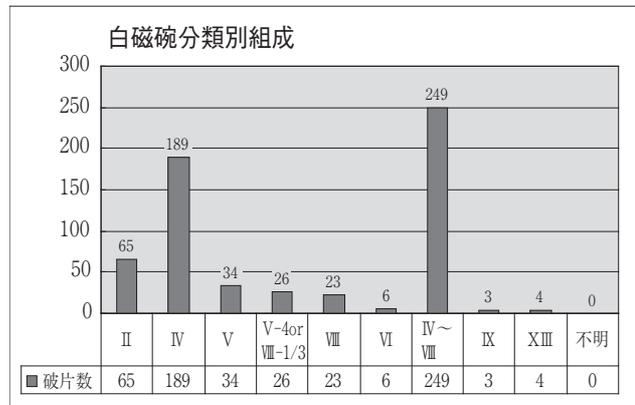
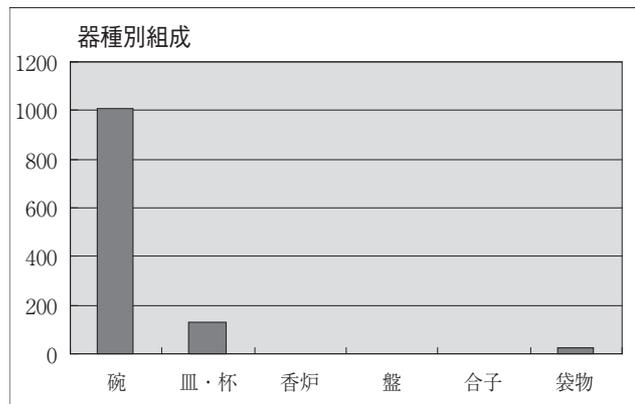
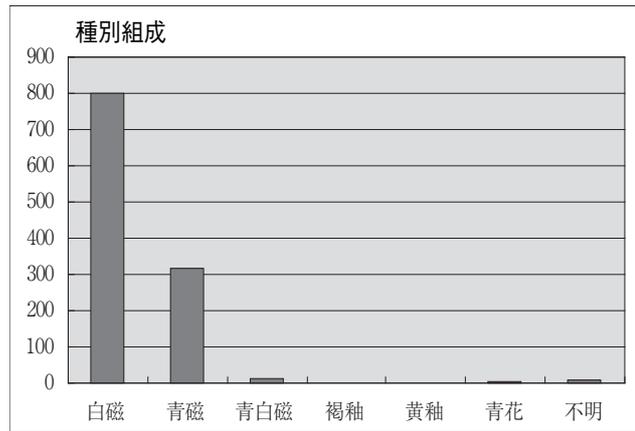
未報告の遺物のうち、今回の調査で確認できた分類についてなるべく網羅するよう努め、以下の83点を実測し、掲載する。

(1) 白磁(1～46)(第4・5図/第2表)

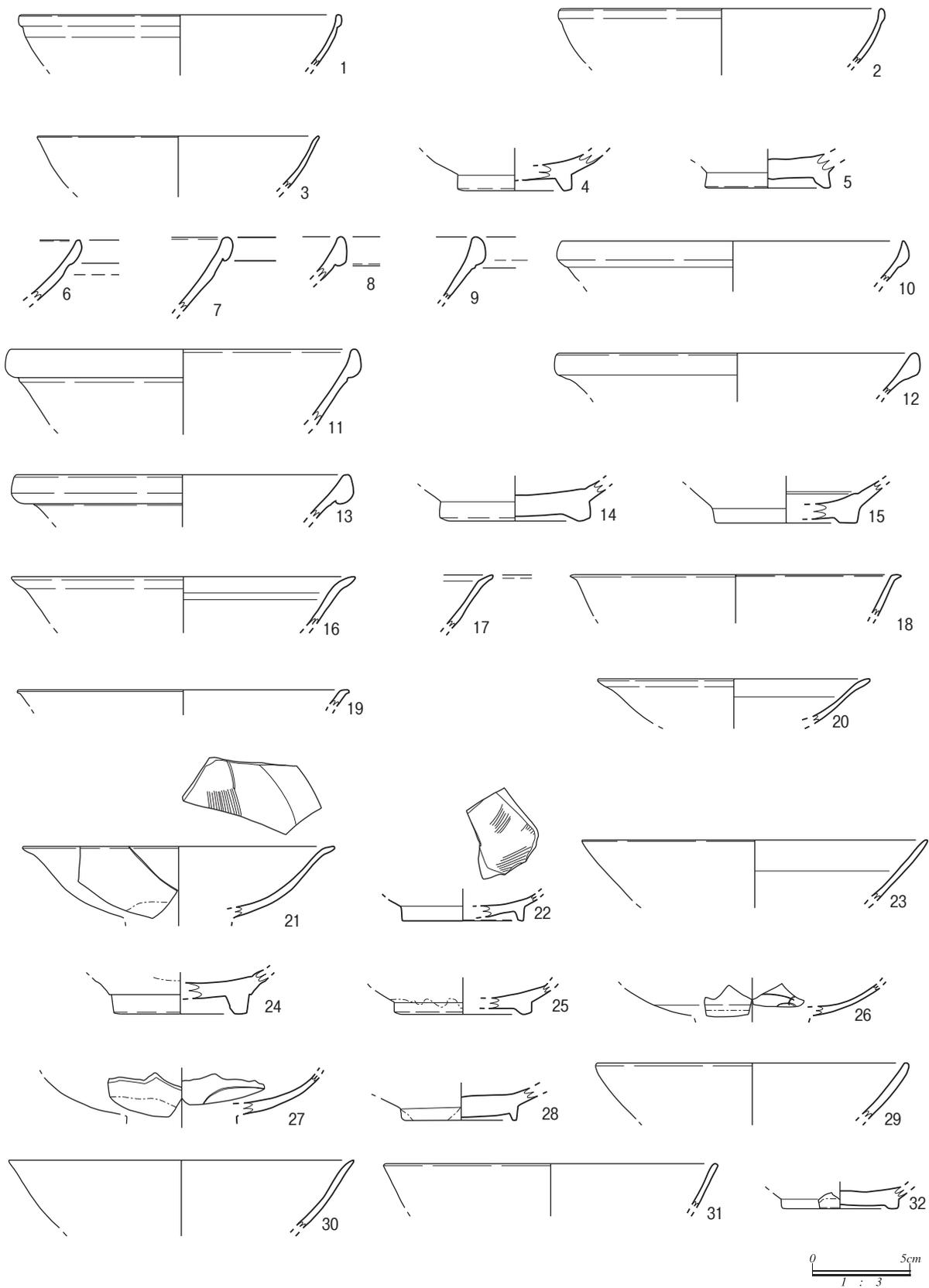
1～32は碗である。1～5はⅡ類である。1・2は内湾しながら立ち上がり、小さな玉縁をつくる。3は玉縁を持たないタイプである。4・5は底部で高台内側に削り工具のスジ目を残している。1～4は釉が薄めにかけてられ、貫入がみられる。5は今回Ⅱ類として判断したが、高台際まで施釉されており、貫入こそ確認できるが他と比較して釉調が若干異なるため、別の分類に属

第1表 全体組成

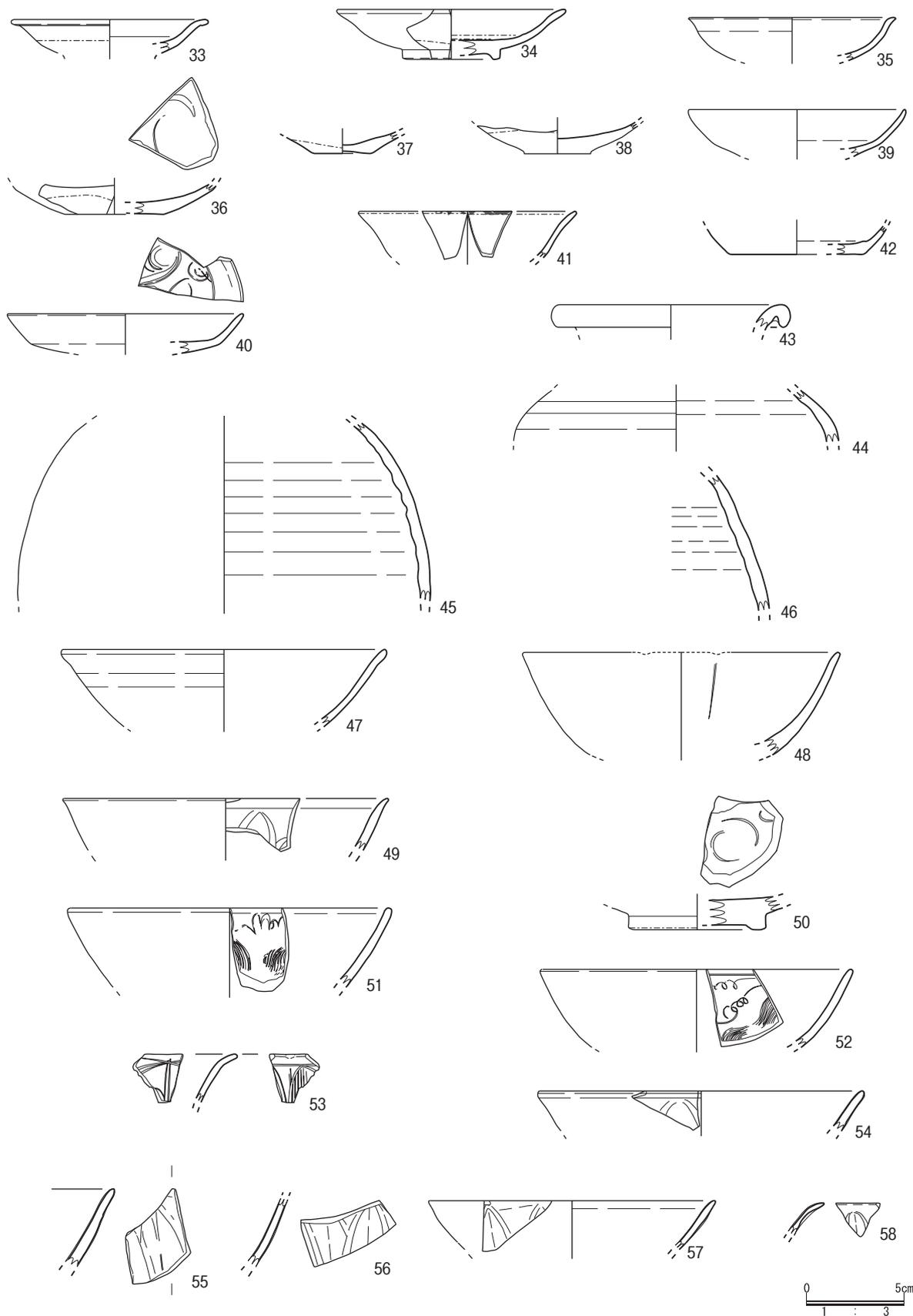
種別	器種	分類	数量	全体比
白磁 800	碗 638	II	65	5.7
		IV	189	16.5
		V	34	3.0
		V-4 or VIII-1/3	26	2.3
		VIII	23	2.0
		VI	6	0.5
		IV~VIII	249	21.8
		IX	3	0.3
		XIII	4	0.3
		不明	39	3.4
	皿 97	II	1	0.1
		III	29	2.5
		IV	2	0.2
		V	7	0.6
VI or VIII		35	3.1	
袋物	VIII	9	0.8	
	IX	7	0.6	
不明	7	0.6		
袋物		21	1.8	
不明		44	3.8	
青磁 317	龍泉窯系 碗 217	I	125	10.9
		II	62	5.4
		III	12	1.0
		IV	9	0.8
		IVより後出	9	0.8
	同安窯系 碗	I	39	3.4
	碗	不明	15	1.3
	龍泉窯系 皿	I	3	0.3
	同安窯系 皿	I	20	1.7
	龍泉窯系 杯	III	5	0.4
	皿・杯	不明	2	0.2
香炉		2	0.2	
盤		1	0.1	
不明		13	1.1	
青白磁	皿		2	0.2
青白磁 他	(壺1・合子2含む)		9	0.8
褐釉	四耳壺		1	0.1
黄釉	盤		2	0.2
青花	(皿・不明)		5	0.4
不明			8	0.7
合計			1144	100.0



第3図 各組成グラフ



第4図 白磁



第5図 白磁・青磁

する可能性もある。6～15はⅡ類と比べて玉縁が厚いタイプである。玉縁の形状は扁平なものから、肉厚で丸みをもつものまで様々である。また、釉色も空色味を帯びるものや、黄灰色を帯びるものなどある。8は6区 SE08 から出土したもので、後述する同安窯系青磁碗（63）と共伴している。11は14区 SE03 からの出土で、龍泉窯系青磁碗（49）と共伴している。14は底部で内底見込みに沈線がある。高台内の削り込みは浅い。外面体部にカンナ削りの痕がある。15は内底見込みに沈線をもち、大きく凹む器形である。16～23は端反碗である。16・17はⅤ類である。17は外面口縁下までヘラ削りされている。18・19は口縁部が外方に屈折し、内面に稜をもつ。20・21は、やや浅い小型碗である。20の口縁部は部分的ではあるが釉溜まりがあり厚く施釉されている。気泡があり細かな貫入がある。21は体部下部まで施釉され、内面にクシ描きの文様がある。20と同様、釉は厚めにかかり気泡と貫入も観察できる。22は内面にクシ描き文様をもち高台は細く短い形である。これらから碗Ⅵ類のⅥ-1a か1b のどちらかの可能性がある。23は口縁から体部上半の破片であるが、体部が直線的に立ち上がっていることから、Ⅷ類と判断した。24は内面見込み部分の釉を輪状に掻き取る。体部と高台の境目の削りが顕著である。25は高台の形状や釉のかかり具合・色調からⅨ類の可能性があると判断している。胎土はやや粗く、0.5ミリ程度の白粒が混じる。26・27は浅型碗のⅩⅢ類である。内面にクシ描きの文様が描かれている。釉は薄く体部下部までかかる。釉切れの部分は橙色に発色している。大型の皿Ⅷ類などの可能性も考えたが、文様などから碗ⅩⅢ類と判断している。28～32は分類不明の碗である。28は外面露胎となっている。高台は細く削り出されているが低く、底部が肉厚の器形である。29はやや内湾しながら立ち上がり、厚みをもつ器壁である。胎土・釉調ともにⅣ・Ⅴに似ている。30は外反した口縁であるためにⅤ類とも考えたが、端部を丸くおさめず尖り気味にしているために、判断を控えた。残存破片においては内外ともに施釉されている。31は直線的に立ち上がり、口縁内側は丸みをもつ。32は高台があるが低く、畳付は水平である。高台部分は露胎である。

33～42は皿である。33は外反し、口縁を玉縁状にする。体部半ばまで釉がかかる。残存破片の内面最下部分は砂目と思われる跡が観察できる。34も33と同様の器形である。内面見込み部分の釉を輪状に掻きとる。35は体部に丸みをもち、口縁を外反させる。口縁の形状からⅤ類の可能性を持つものとして分類している。36は体部下半までやや厚めに施釉している。内面に文様が観察できる。施釉状態や化粧土の有無によりⅤ類の可能性があるとしている。37は胎土がやや粗い。施釉は体部下半までされるが化粧土は確認できない。体部と底部の境は明確である。38は釉が薄くかかり露胎部分との境は橙色に発色する。体部と底部の境は明瞭で体部外面はケズリが観察できる。39は体部中位に段がある。胎土は良好で釉は薄くかかる。40は体部中位で屈曲し直口する。内面見込み部はクシ描き文がある。41・42はいわゆる口禿げとよばれるタイプのものである。41はやや外反しながら口縁にいたる。口縁部に煤が付着している。42は見込みに段を持ち、外底の釉は施釉後に拭きとっている。

43～46は袋物である。43は四耳壺の口縁部である。口縁を丸く折り曲げ、その屈折部分に釉が厚く溜まる。44～46の内面は、ロクロ成形による段が顕著である。

(2) 青磁 (47~74) (第5・6図/第2表)

47~66は碗である。口縁はやや外反している。外面は成形時の段がある。48は内面に白堆線を持つ。残存破片部分においては無文である。49は口縁端部をやや尖り気味におさめる。内面に片切彫りによる草花文が描かれる。50は高台際までは施釉されるが、底部・畳付けは露胎である。文様の判別はできない。底部は肉厚である。51・52はクシ描きと片切彫りを組み合わせて文様を描いている。53は1点のみの確認であった。口縁部を外方に屈折させ、端部は稜花となる。外面は蓮弁とクシ描きの組み合わせで、内面にもクシ描きにて文様が描かれる。54~57は48~52と同じ器形をもち、外面に蓮弁が片切彫りされるタイプである。54は蓮弁の中に鎬が無い類のもので、他は鎬をもつ。57はやや小型の可能性はある。58は胎土・釉ともに非常に精緻である。器壁は薄く、釉は厚くかかる。鎬蓮弁の幅が細い。59は内湾しながら立ち上がり、口縁を外反させる。釉はやや厚めにかかる。58ほどの精緻さには欠けるが、良好なつくりである。60は幅広の蓮弁を外面にもつ。内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。61は雷文帯が描かれる。体部から直口している。62は内湾気味に立ち上がり、線彫りにて蓮弁を描く。花卉は体部から底部へ向かう直線と、その上部に配される波状線により表現される。釉に気泡がみられ、胎土も粗質である。63は同安窯系の無文碗である。白磁碗Ⅳ類と共伴しており、小破片であるが掲載した。64は内面にクシ描きにて文様を描く。器壁がやや厚い。65は外面に細いクシ描き文様が描かれる。器壁は薄いが口縁に向かって厚みをもつ。66は体部下部にクシ描き文が確認できる。内面は施釉、残存範囲では外面は露胎である。高台内は面取りされ、底部はトキン状ケズリである。

67は杯である。内湾気味に立ち上がり口縁部で屈曲、さらに上につまみ上げている。体部内面は縦に凹面のケズリを入れて花卉に見立てる。胎土・釉ともに精良である。

68~71は皿である。68は底部付近の釉が厚くかかる。全面施釉後、底部の釉を掻き取っている。内面は判別できないが文様が描かれている。69は体部中位で屈曲し外反して口縁へいたる。屈曲部分の内面に釉が溜まる。70・71は内底面にヘラ描き文と点描によるジグザグ文が描かれている。全面施釉後、底部の釉を掻き取っている。

72・73は香炉である。72は丸みをもつ器形である。肩部は貼り付けにより装飾され、その下部に文様が描かれている。73は口縁端部が平坦で内側に張り出しをもつ。

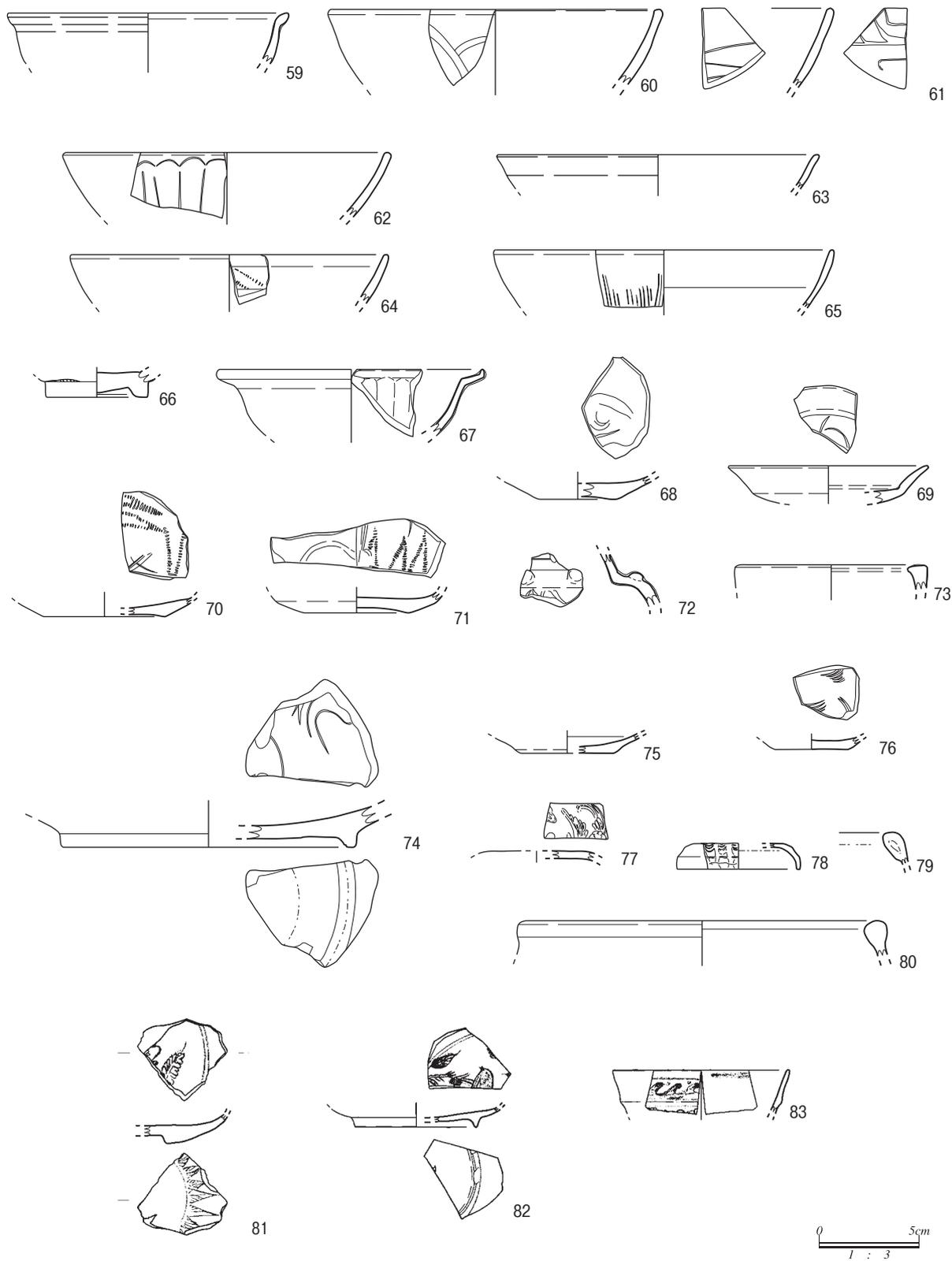
74は盤である。高台内側から底部の一部を露胎とする。高台内際にはケズリによる溝が顕著である。

(3) その他 (75~83) (第6図/第2表)

75~78は青白磁である。75・76は皿である。ともに全面施釉後、底部の釉を掻き取っている。75は内面に沈線をもち、76は文様が描かれている。77・78は合子である。77は天井部に鳳凰と思われる文様が彫られている。残存破片は、その羽の部分であると思われる。78も文様が彫られた素地に施釉されている。口縁部は水平に削り、内面とともに露胎となる。

79・80は黄釉の盤である。全面施釉後に口縁付近は拭き取っている。

81~83は青花である。81・82は皿である。81は碁筒底で、畳付け部分の釉は削る。外面には芭蕉葉文、内面には草花文が描かれる。82は高台を細く削り出し、畳付けの釉を削り取る。底部は



第6図 青磁・その他

第2表 遺物観察表

番号	種別	器種	分類	法量	胎土色調	釉 色調	備考(注記・その他)
1	白磁	碗	II-1a	口径 (16.0)	灰白7.5Y8/2	浅黄5Y7/3	6区2層
2	白磁	碗	II-1	口径 (16.2)	灰白5Y8/2	灰黄2.5Y8/2	6区上SK44
3	白磁	碗	II-3か4	口径 (14.2)	灰白10Y7/1	灰白5Y7/2	7区2層
4	白磁	碗	II	口径 (5.8)	灰白10Y7/1	灰白5Y7/2	5区6層下M-9
5	白磁	碗	II	底径 (6.4)	浅黄5Y8/3	浅黄5Y8/3	12区SD01
6	白磁	碗	IV	—	灰白10Y8/1	灰白5GY8/1	4区SE2
7	白磁	碗	IV	—	灰白7.5Y7/1	灰白5Y7/2	9区4層セ-8
8	白磁	碗	IV	—	灰白5Y8/2	灰黄2.5Y7/2	6区SE08
9	白磁	碗	IV	—	灰白5Y7/1	灰白7.5Y7/2	9区5層キ-6
10	白磁	碗	IV	口径 (17.4)	灰白10Y8/1	灰白10Y8/1	6区3層
11	白磁	碗	IV	口径 (17.1)	灰白5Y8/2	浅黄5Y7/3	14区SE3
12	白磁	碗	IV	口径 (18.1)	灰白7.5Y8/1	灰白5Y7/2	6区下
13	白磁	碗	IV	口径 (16.8)	灰白7.5Y7/1	灰白5Y7/2	5区6層下L-12
14	白磁	碗	IV-1a	底径 (7.6)	灰白5Y8/2	浅黄5Y7/3	5区6層下
15	白磁	碗	IV-b	底径 (7.2)	灰白2.5Y7/1	灰白5Y7/2	4区SD72
16	白磁	碗	V-2	口径 (17.4)	灰白5Y8/2	浅黄5Y7/3	5区5層
17	白磁	碗	V-2a	—	灰白5Y8/2	灰白5Y7/2	10区2層
18	白磁	碗	V-4/VIII-1か3	口径 (16.4)	灰白5Y8/1	灰白2.5Y7/1	6区3層
19	白磁	碗	V-4/VIII-1か3	口径 (16.8)	灰白5Y7/2	灰白2.5Y7/1	7区5・6層a-2
20	白磁	碗	VI-1a	口径 (13.8)	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y6/2	7区2層
21	白磁	碗	VI-1b	口径 (15.8)	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y6/2	7区SP139
22	白磁	碗	VI-1b?	底径 (6.2)	灰白2.5Y8/1	灰黄2.5Y7/2	4区5層上層
23	白磁	碗	VII	口径 (17.6)	灰白2.5Y8/2	灰白2.5Y7/1	5区6層下M-11
24	白磁	碗	VII	底径 (6.7)	浅黄2.5Y8/3	灰黄2.5Y6/2	5区SD38
25	白磁	碗	IX?	底径 (7.0)	灰白5Y8/1	灰白5Y7/2	14区SE1
26	白磁	碗	XIII	—	灰白5Y8/2	灰白2.5Y7/1	6区上SP575
27	白磁	碗	XIII	—	灰白2.5Y8/1	灰白5Y7/2	6区上4層
28	白磁	碗	不明	底径 (5.6)	灰白5Y7/1	灰白7.5Y7/2	12区2層
29	白磁	碗	不明	口径 (15.8)	灰白5Y8/1	灰白5Y7/2	6区2層
30	白磁	碗	不明	口径 (17.6)	灰白7.5Y8/1	灰白10Y8/1	6区3層
31	白磁	碗	不明	口径 (16.8)	灰白7.5Y7/1	灰白5Y7/1	6区
32	白磁	碗	不明	底径 (6.0)	灰白5Y8/2	灰白5Y8/2	18区2層
33	白磁	皿	III	口径 (9.8)	灰白2.5Y8/1	灰白10Y7/1	5区6層下J-12
34	白磁	皿	III-1	口径 (11.6) 底径 (5.0)	灰白5Y7/2	灰白7.5Y7/1	6区3層
35	白磁	皿	V?	口径 (10.4)	灰白10Y8/1	明緑灰10GY8/1	15区No52
36	白磁	皿	V?	底径 (5.0)	灰白10Y8/1	灰白7.5Y7/1	5区3層
37	白磁	皿	VI-1	底径 (3.0)	灰白5Y8/1	灰白5Y8/2	4区6層Q-8
38	白磁	皿	VI (かVII)	底径 (3.4)	灰白5Y8/1	灰白5Y8/2	4区SD66
39	白磁	皿	VII-1a	口径 (11.0)	灰白10Y8/1	浅黄5Y7/3	15区5層
40	白磁	皿	VIII-2c?	口径 (12.1)	灰白5Y8/1	灰白5Y7/2	7区SK21・7区3層Z-5接合
41	白磁	皿	IX-1c	口径 (11.1)	灰白5Y8/1	灰白5Y8/1	4区SK78
42	白磁	皿	IX	底径 (6.8)	灰白5Y8/1	灰白7.5Y7/1	7区5・6層a-2
43	白磁	四耳壺	III	口径 (11.4)	灰白5Y8/1	灰白5Y7/2	4区5層T-12
44	白磁	袋物	—	—	灰白7.5Y8/1	灰白7.5Y7/1	5区5層
45	白磁	袋物	—	—	灰白10Y8/1	灰白5GY8/1	12区5層
46	白磁	袋物	—	—	灰白10Y8/1	灰白7.5Y8/1	13区3層
47	青磁	碗	龍I-1	口径 (16.5)	灰白7.5Y8/2	灰白5Y7/2	9区3層サ-4
48	青磁	碗	龍I-4c	口径 (16.0)	灰白2.5Y8/1	浅黄5Y7/3	6区上SK35
49	青磁	碗	龍I-2	口径 (16.6)	灰白N8/0	オリープ灰10Y6/2	14区SE3
50	青磁	碗	龍I-2?	底径 (7.0)	灰白5Y7/1	オリープ灰5GY6/1	4区5層C-8
51	青磁	碗	龍I-3a	口径 (16.4)	灰白10Y8/1	オリープ灰2.5Y6/1	5区4層下
52	青磁	碗	龍I-3a	口径 (15.8)	灰白10Y8/1	灰オリープ7.5Y6/2	16区表土
53	青磁	碗	龍I-6	—	灰白7.5Y8/1	オリープ灰10Y6/2	14区2層
54	青磁	碗	龍II-a	口径 (16.4)	灰白10Y8/1	明オリープ灰5GY7/1	9区5層コ-7
55	青磁	碗	龍II-b	—	灰白10Y8/1	オリープ灰10Y6/2	4区6層O-9
56	青磁	碗	龍II-b	—	灰白10Y8/1	オリープ灰5GY6/1	5区12トレンチ
57	青磁	碗	龍II-b	口径 (14.6)	灰白10Y8/1	灰オリープ7.5Y5/2	7区2層

第3表 遺物観察表

番号	種別	器種	分類	法量	胎土色調	釉 色調	備考 (注記・その他)
58	青磁	碗	龍Ⅲ-2C	—	灰白N8/0	オリーブ灰5GY6/1	9区5層カ-6
59	青磁	碗	龍Ⅳ	口径 (14.0)	灰白10Y8/1	オリーブ灰10Y6/2	9区4層
60	青磁	碗	龍Ⅳ	口径 (16.4)	灰白N7/0	オリーブ灰10Y5/2	5区12トレンチ
61	青磁	碗	龍Ⅳより後	—	灰白10Y8/1	オリーブ灰5GY6/1	4区3層 雷文帯
62	青磁	碗	龍Ⅳより後	口径 (16.0)	灰白N7/0	オリーブ灰5GY6/1	4区2層 線彫り蓮弁
63	青磁	碗	同Ⅰ	口径 (16.0)	灰白2.5Y7/1	オリーブ黄5Y6/3	6区SE8
64	青磁	碗	同Ⅰ-bかc	口径 (15.8)	灰白5Y8/1	オリーブ黄5Y6/3	6区3層
65	青磁	碗	同Ⅰ-bかc	口径 (16.8)	灰白5Y8/1	灰オリーブ5Y6/2	9区4層
66	青磁	碗	同Ⅰ	底径 (5.0)	灰白5Y8/1	灰オリーブ5Y6/2	4区SD50 S-8
67	青磁	杯	龍Ⅲ-3a	口径 (13.2)	灰白7.5Y8/1	灰オリーブ5Y5/3	5区6層上O-13
68	青磁	皿	龍Ⅰ-1	底径 (3.8)	灰白5Y8/1	オリーブ灰10Y6/2	11区2層
69	青磁	皿	同Ⅰ	口径 (9.8)	灰白7.5Y8/1	灰オリーブ7.5Y6/2	9区4層ケ-7
70	青磁	皿	同Ⅰ	底径 (6.0)	灰白10Y8/1	オリーブ灰10Y6/2	7区2層
71	青磁	皿	同Ⅰ	底径5.0	灰白7.5Y7/1	オリーブ灰10Y6/2	5区6層下R-15
72	青磁	香炉	龍	—	灰白10Y8/1	オリーブ灰10Y6/2	12区2層
73	青磁	香炉	龍	口径 (8.4)	灰白N8/0	オリーブ灰5GY6/1	19区2?3層
74	青磁	盤	龍	底径 (14.4)	灰白2.5GY8/1	オリーブ灰5GY6/1	16区No91 露胎部にぶい赤褐2.5YR4/4
75	青白磁	皿		底径 (4.8)	灰白10Y8/1	明緑灰7.5GY8/1	5区SP542
76	青白磁	皿		底径 (3.6)	灰白7.5Y8/1	明オリーブ灰2.5GY7/1	5区6層上O-12
77	青白磁	合子		—	灰白2.5GY8/1	明緑灰10GY7/1	5区SD2
78	青白磁	合子		口径 (6.2)	灰白10Y8/1	明オリーブ灰2.5GY7/1	不明
79	黄釉	盤		—	浅黄5Y8/3	オリーブ灰10Y5/2	13区3層
80	黄釉	盤		口径 (17.4)	灰白7.5Y8/2	灰オリーブ7.5Y4/2	6区1～3層
81	青花	皿		—	灰白N8/0		10区SD32
82	青花	皿		—	灰白10Y8/1		4区5層カ-4
83	青花	香炉		—	灰白10Y8/1		5区4層

やや凹む。内面は二重圏線の内側に鳥と草木が描かれる。文様の描き方が81と比較して精細である。83は香炉と判断している。外面に波濤文が描かれる。それ以外の文様は判別できない。

4 出土傾向

出土遺物の総数と概略については、前項に述べた。ここでは調査区別の傾向と、遺構内での遺物共伴について述べる。

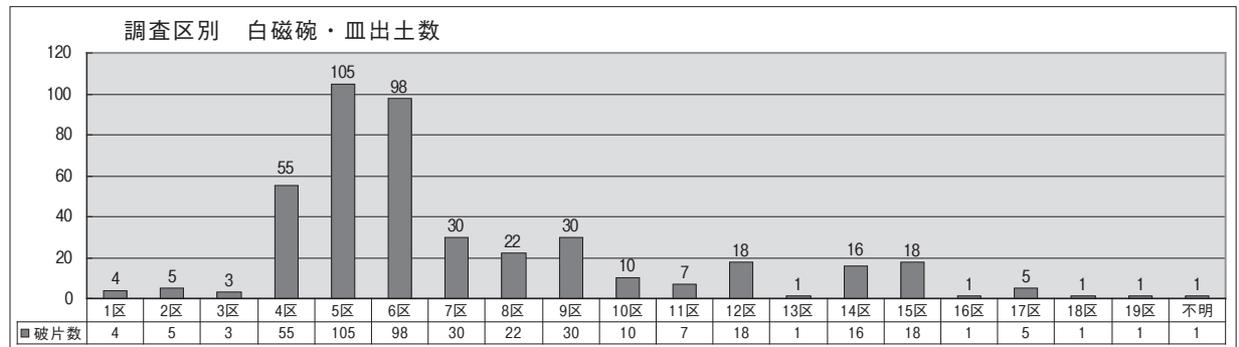
(1) 調査区別出土状況について (第4～6表・第7～9図)

まず白磁からみていく (第4表・第7図)。5・6区の出土量が突出しており、全体の47%を占める。6区は、碗Ⅱ類の出土が目立つ。また胎土・釉調・化粧土を持つ点がⅡ類と同様である、碗ⅩⅢ類が確認できている。碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類は数量の差こそあるがほとんどの区で出土している。しかし碗Ⅴ-4類やⅧ類は集中的な出土も無ければ、広範囲に出土することもない。皿についても、5・6区からの出土が多い。皿Ⅳ～Ⅶ類は、ほぼこの区域での確認である。皿Ⅲ・Ⅷ類は5・6区以外での出土もみられる。皿Ⅸ類が7点ほどであるが確認できており、この分類については碗・皿ともに6区からは出土していない。

次に青磁について述べる (第5表・第8図)。5区の出土量が他を圧倒している。数量的に5区には及ばないもののその次に割合を占める9区は、白磁の出土率が5.0%に対して青磁は14.8%、また破片数でも青磁が白磁を上回っており、青磁優勢となる様相をもつ。4・6区につ

第4表 調査区別出土数（白磁碗・皿）

区	白磁碗								白磁碗 合計	白磁皿								調査区別	
	II	IV	V	V-4or VII-1/3	VII	VI	IX	X III		II	III	IV	V	IV	VII	VIII	IX	合計	全体比
1区		2					1		3						1		4	0.9	
2区		3	1						4					1			5	1.2	
3区	1		2						3								3	0.7	
4区	6	26	2	4	2	1			41	1	6		2		2	3	55	12.8	
5区	8	53	7	3	4	1	1		77		9	1	6	10	1		105	24.4	
6区	27	36	2	5	5	1		4	80		5	1	1	7	2	2	98	22.7	
7区	7	5	4	4	3	2			25		3				1	1	30	7.0	
8区	3	9	1	3	1	1			18		2				2		22	5.1	
9区	2	13	6	4	3				28		1					1	30	7.0	
10区	1	2	4		2				9				1				10	2.3	
11区	2	3	1	1					7								7	1.6	
12区	1	10	3	1	1				16						1	1	18	4.2	
13区	1								1								1	0.2	
14区	4	8	2				1		15					1			16	3.7	
15区		17			1				18								18	4.2	
16区			1						1								1	0.2	
17区	1	1		1	1				4					1			5	1.2	
18区		1							1								1	0.2	
19区	1								1								1	0.2	
不明									0		1						1	0.2	
合計	65	189	36	26	23	6	3	4	352	1	27	2	7	20	6	9	7	431	100.0
全体比	18.5	53.7	10.2	7.4	6.5	1.7	0.9	1.1	100.0										



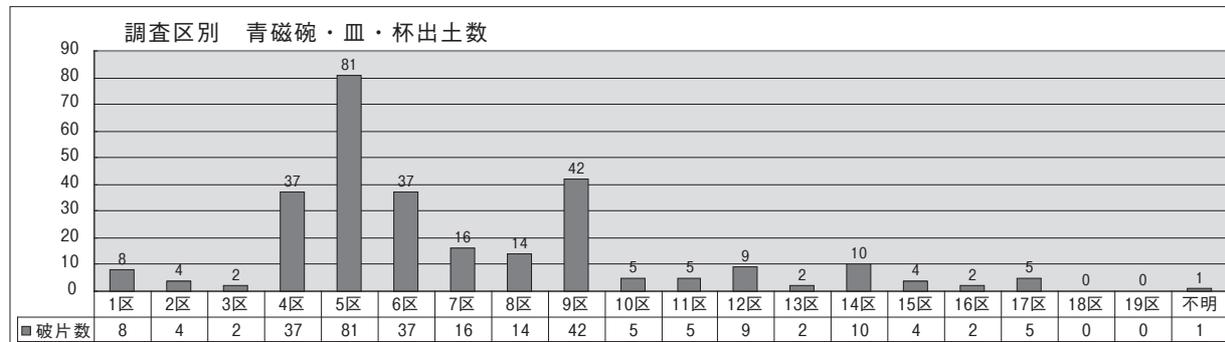
第7図 調査区別出土数（白磁碗・皿）

いては同率で13.0%ずつ占め、白磁同様に高い比率である。しかし6区は白磁と比較した場合その出土率は減少し、龍泉窯系碗Ⅰ類・同安窯系碗Ⅰ類の出土は一定量あるものの、それ以外の碗については目立たない。4区については、龍泉窯系碗Ⅰ類・同安窯系碗Ⅰ類の数に加えて龍泉窯系碗Ⅱ・Ⅳ類以降も安定してみられ、さらには精製品である龍泉窯系Ⅲ類が確認できる。4・6区は数量的には同じであるが、若干様相が異なるといえる。

なお、その他の貿易陶磁器についても4～6区に集中している(第6表・第9図)。青白磁の出土はほとんどがこの区域からである。12区は、白磁・青磁の碗皿の出土に関しては目立ったデータは得られていないが、6区に次ぐ数量が認められる。白磁袋物は、全体数からみれば1.8%を占めるに過ぎないが、調査区の広い範囲で確認できている。

第5表 調査区別出土数（青磁碗・皿・杯）

区	青磁碗					青磁皿		青磁杯	調査区別		
	龍泉窯系				同安窯系 IVより後出	龍泉窯系 I	同安窯系 I	龍泉窯系 III	合計	全体比	
	I	II	III	IV							
1区	6		2						8	2.8	
2区					1	3			4	1.4	
3区		2							2	0.7	
4区	11	8		1	5	5		5	2	37	13.0
5区	33	21	3	2		11	2	7	2	81	28.5
6区	22	3		2		7		3		37	13.0
7区	11	2				3				16	5.6
8区	9	1		1	1	1			1	14	4.9
9区	11	15	7	3	2	3		1		42	14.8
10区	1	4								5	1.8
11区	2	1				1	1			5	0.0
12区	3	3				3				9	3.2
13区	1	1								2	0.7
14区	8							2		10	3.5
15区	4									4	1.4
16区	1							1		2	0.7
17区	2					2		1		5	1.8
18区										0	0.0
19区										0	0.0
不明		1								1	0.4
合計	125	62	12	9	9	39	3	20	5	284	100.0
全体比	44.0	21.8	4.2	3.2	3.2	13.7	1.1	7.0	1.8	100.0	



第8図 調査区別出土数（青磁碗・皿・杯）

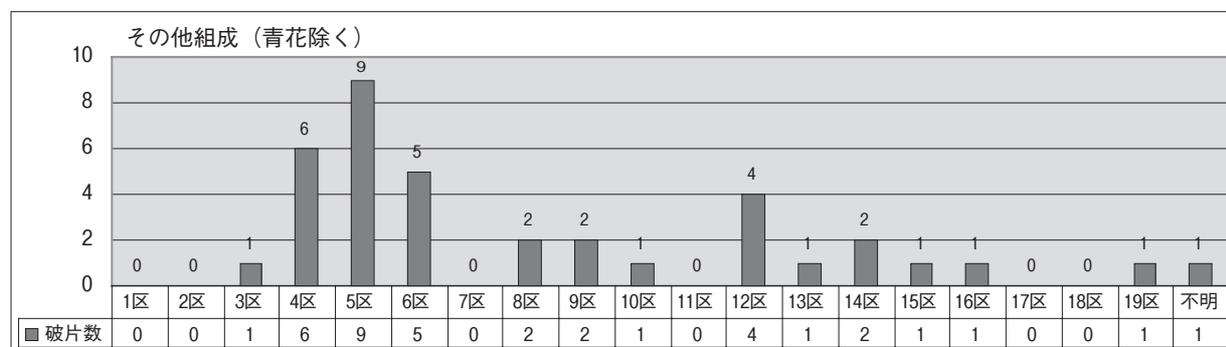
(2) 遺構内共伴の貿易陶磁器について（第6表）

比較的明確に分類できた遺物のうち遺構内で共伴しているものを抽出した。また、報告書掲載の遺構についてはその他の土器情報を援用することが可能である。そこで、年代を捉える際の指標として畿内産瓦器椀・東播系須恵器コネ鉢を取り上げ、これらと共伴が確認できた貿易陶磁器については単数の出土であっても対象とした。これにより馬越遺跡の特徴として次の点が挙げられる。

- ① 白磁碗Ⅱ・Ⅳ類がセットとなる場合には青磁は伴っていない。
- ② 白磁碗Ⅳ類がⅡ類以外とセットになる場合、または白磁碗はⅣ類のみが出土している場合には青磁との共伴がみられる。
- ③ 白磁碗ⅤはⅣ類と共伴する場合とⅦ類と共伴する場合がある。

第6表 調査区別出土数（その他の貿易陶磁器）

区	白磁袋物	青白磁	青磁香炉	青磁盤	褐釉	黄釉	青花	合計	全体比
1区	8							0	0.0
2区								0	0.0
3区		1					1	2	4.8
4区	4	2						6	14.3
5区	6	3					1	10	23.8
6区		3			1	1		5	11.9
7区								0	0.0
8区	2							2	4.8
9区	2						1	3	7.1
10区	1						1	2	4.8
11区								0	0.0
12区	2	1	1					4	9.5
13区	1					1		2	4.8
14区	2							2	4.8
15区	1							1	2.4
16区				1				1	2.4
17区								0	0.0
18区								0	0.0
19区			1					1	2.4
不明		1						1	2.4
合計	21	11	2	1	1	2	4	42	100.0



第9図 調査区別出土数（その他の貿易陶磁器）

- ④ 白磁碗・皿Ⅷ類は青磁が伴う。
- ⑤ 龍泉窯系青磁碗Ⅱ類は、白磁碗Ⅴ類またはⅧ類と共伴する確率が高い。
- ⑥ 陶磁器と共伴する瓦器碗・東播コネ鉢についてみると、白磁碗Ⅱ類が出土する遺構では、和泉型瓦器碗Ⅱ-1期・楠葉型瓦器碗Ⅰ-3期を含む。これらは12世紀前半の年代を示す。また白磁碗Ⅳ類は、和泉型瓦器碗Ⅱ-1～Ⅲ-2期・東播コネ鉢Ⅱ-2～Ⅲ-1期を含む。これらは12世紀前半から13世紀の時間幅を示す。白磁碗Ⅴ・Ⅷ類のセットと瓦器碗、あるいはⅤ類と瓦器碗が共伴する場合は、和泉型瓦器碗はⅢ-1・2期である。これは12世紀末から13世紀初頭にあたる。

以上から貿易陶磁器の搬入または使用の年代に時期差があることが推測できる。

第7表 貿易陶磁器の共伴する遺構（その1）

遺跡名	遺構名	白磁	報告No/部位	青磁	報告No/部位	その他	報告No/部位	共伴資料
馬越遺跡 (2001小野)	1区SD-1	碗IV-1b IV 皿VIII 口縁	(2) (3)	龍碗I-4a	(1)			
	1区集石2	碗IV IX 口縁 口縁		龍碗I-2 I-4 皿-2C 口縁 口縁 口縁				
	2区SP-33	碗IV	(29)					和・瓦器II-3・III-2
	4区SD-32	碗IV V-4orVIII-1/3 口縁 口縁					青花皿ゴケ底 未-(81)	
	4区SD-50	皿II or III 口縁		同碗I	底			
	5区SE-2	碗IV 皿VI 底						東播コネ鉢II-2
	5区SD-1	碗IV 皿VI 体		龍碗II-b	口縁			
	5区SD-2	碗IV V (27) (28)		同皿I-2b	(29)		白磁四耳壺 (26) 青白磁合子 未-(77)	東播コネ鉢II-2~III-1
	6区SD-1	碗IV-1	(11)					和・瓦器II-1・II-1~2 II-2~3
	6区SK-33	碗IV	口縁					和・瓦器II-2~3
	6区SK-35	皿VI-1	体	龍碗I-4c	未-(48)			
	6区SK-44	碗II-1 II IV 口縁 口縁						
	6区SE-1	碗II-1	(55)					楠・瓦器I-3~II-1
	6区SE-3	碗II IV IV-1 (88・89) (87) (90)						和・瓦器II-1・II-2~3 II-3・III-1・III-2
	6区SE-4	碗II-1	口縁				褐釉四耳壺 (105)	
	6区SE-8	碗IV	未-(8)	同碗I	未-(63)			
	7区SD-32	碗IV-1a	底	龍碗I	口縁			
	7区SK-18	碗V VIII 底 体		龍碗I	体			和・瓦器III-1~2
	7区SE-1	碗V or VIII	体	龍碗II-a	口縁			
	8区SE-1	碗VIII 皿II-1a or III 口縁	底 口縁	同碗I-1b I-1b or c	(21) 口縁			
	10区SD-7	碗V-4 V-1 VIII-2? 口縁 口縁 口縁	口~体 口縁 口縁	龍碗II-a	口縁			
	11区SK-61	碗V	(53)					和・瓦器III-2
	11区SP183	碗II	口縁	龍碗I-2	底			
	12区SK-32	碗IV-2a V (64)	底					
	12区SP-150	碗V-1	口縁	龍碗II-b~d	体			
	14区SE-1	碗IX?	未-(25)	龍碗I-1	底		白磁袋物 類	
14区SE-3	碗IV	未-(11)	龍碗I-2	未-(49)				

*報告書掲載遺物については番号を、馬越遺跡の未報告分については部位を記入した。

なお、未報告だが今回実測図掲載分については「未- (**)」の形式で第4~6図内の番号を記入している。

*備考に記したその他の土器の年代については、中世土器研究会1995の該当箇所を参考にした。

*共伴資料に関しては、和泉型瓦器を「和・瓦器」楠葉型瓦器を「楠・瓦器」と記載した。

5 周辺遺跡の様相

ここまで馬越遺跡の貿易陶磁器について概観したが、周辺の遺跡についても触れておきたいと思う。取り上げる遺跡は、八町1号遺跡2次調査と馬越和多地遺跡2次である。

八町1号遺跡(以下八町)は、馬越とは蒼社川を挟んで対岸の右岸に位置する。伊予国府推定地に位置しているが、国府と断定できる遺構の検出にはいたっていない。緑釉陶器、灰釉陶器やその他の古代の遺物、また貿易陶磁器については越州窯系青磁碗・白磁I類の初期貿易陶磁器が確認されており、国府との関わりのなかで営まれた集落遺跡と考えられている(中野ほか1995)。

第8表 貿易陶磁器の共伴する遺構（その2）

遺跡名	遺構名	白磁	報告No	青磁	報告No	その他	報告No/部位	共伴資料
八町1号2次 (1995中野・柴田ほか)	SK-1	碗Ⅱ-1	(69)					和・瓦器Ⅱ-2~3
		Ⅳ	(66)					
		Ⅳ-1	(71)					
		皿Ⅵ	(70)					
	SK-2	碗Ⅱ	(166)					
		Ⅱ-1	(167)					
		Ⅳ	(165)					
		(168)						
		(169)						
	皿Ⅵ	(171)						
		(172)						
馬越和多地遺跡2次 (2006梅木・兵頭)	1区SE-1			同碗Ⅰ-1b	(34)			和・瓦器Ⅱ-3~Ⅲ-1
	1区SK-1	碗Ⅴ	(163)	龍碗Ⅰ	(164)			和・瓦器Ⅲ-1
				報告ではⅢ類に分類されているが、器形からⅠと判断した				
	2区SE-3	碗Ⅳ	(60)	龍碗Ⅰ-1	(61)	陶器壺	(63)	
		V-4orⅧ-1/3	(59)	同皿Ⅰ-2b	(62)			
	4区SE-4			同碗Ⅲ	(86)			吉備系土師器Ⅲ-2
			同皿Ⅲ	(87)			東播コネ鉢Ⅱ-2~Ⅲ-1	
			報告では龍泉系ⅢⅠに分類されているが、器形・文様から同安ⅢⅠと判断した					
4区SE-6	碗Ⅳ	(136)		同碗Ⅰ	(141)			東播コネ鉢Ⅲ-1
	V	(137)						
	V-4orⅧ-1/3	(138)						
	Ⅷ	(140)						
	皿Ⅵ?	(139)						
5区SE-7	碗Ⅳ	(155・156)						和・瓦器Ⅲ-1
SP53				同皿Ⅰ	(176)			和・瓦器Ⅲ-1
SP351	碗Ⅳ	(208)						和・瓦器Ⅲ-1
SP407	碗Ⅷ	(224)						和・瓦器Ⅱ-3~Ⅲ-1

* 報告書掲載遺物の番号を記入した。

* 備考に記したその他の土器の年代については、八町1号遺跡・馬越和多地2次遺跡の各報告書掲載に拠った(中野・柴田1995、梅木・兵頭2006)。

ただし馬越和多地遺跡2次のSP53・351・407については中世土器研究会1995を参考に神石が判断した。

出土した貿易陶磁器は800点を超えている。畿内産瓦器椀や東播系須恵器の出土も多い。

馬越和多地遺跡2次(以下和多地)は、馬越から北東方向に300mほどの近接地にある。方形区画と考えられる溝や井戸が検出されている。遺物は土師器杯・皿、和泉型瓦器椀、東播系コネ鉢、吉備系土師器椀、貿易陶磁器などが出土している(梅木・兵頭2006)。

馬越遺跡と同様、遺構からの出土を対象に複数の貿易陶磁器あるいは貿易陶磁器と瓦器椀・東播コネ鉢・吉備系土師器のいずれかが共伴しているものを抽出した(第8表)²⁾。八町は、白磁碗Ⅱ・Ⅳ類に白磁皿Ⅳ類がセットになる場合が目立ち、青磁を伴う遺構は1箇所である。和多地は、青磁碗・皿の出土が多いが、馬越と八町でみられた白磁碗Ⅱ類は出土していない。加えて八町と比較した場合、白磁碗Ⅴ・Ⅷ類の比率が高く、また4区SE-6では13世紀後半を示す吉備系土師器椀と同安系青磁碗・皿が共伴している。馬越・八町・和多地に共通しているのは白磁碗Ⅳ・Ⅴ類のセットが出土している点と、青磁碗・皿と瓦器椀が共伴した場合、瓦器はⅢ期以降を含む

第9表 貿易陶磁器の共伴する遺構（その3）

遺跡名	遺構名	C期						D期						E期		F期				他	
		白磁碗			白磁皿			白磁碗		白磁皿		龍碗	龍皿	同碗	同皿	龍碗	白磁碗	白磁皿	龍碗		龍杯
		II	IV	V	II	VI	V-4 VII-1/3	VII	III	VIII	I	I	I~III	I	II	IX	IX	III	III		
馬越遺跡 (2001小野)	1区SD-1		◎						○	○											
	1区集石2		○							◎						○		○			
	4区SD-32		○				○												青花皿		
	4区SD-50				△				△				○								
	5区SE-2		○			○															
	5区SD-1		○			○								○							
	5区SD-2		○	○										○					白磁四耳壺 青白磁合子		
	6区SK-35					○					○										
	6区SK-44	◎	○																		
	6区SE-3	○	◎																		
	6区SE-4	○																	褐釉四耳壺		
	6区SE-8		○										○								
	7区SD-32		○								○										
	7区SK-18			○				○			○										
	7区SE-1			△				△							○						
	8区SE-1				△			○	△					◎							
	10区SD-7			○			○	○(?)							○						
11区SP183	○									○											
12区SK-32		○	○																		
12区SP-150			○											○							
14区SE-1										○					○(?)			白磁袋物			
14区SE-3		○								○											
八町1号2次 (1995中野・柴田ほか)	SK-1	○	◎			○															
	SK-2	◎	○			○															
	SK-3	○	○			○															
	SK-6				○		○			○											
	SE-1		○				○														
馬越和多地 遺跡2次 (2006梅木・兵頭)	1区SK-1			○						○											
	2区SE-3		○				○			○									陶器壺		
	4区SE-4												○	○							
	4区SE-6		○	○		○(?)	○	○													

*宮崎2000では、C期-11世紀後半～12世紀前半・D期-12世紀中頃～後半・E期-13世紀前後～前半・F期-13世紀中頃～14世紀初頭前後と、年代設定がおこなわれている。この年代設定は伊予の搬入年代を検討する場合若干時差があるものと思われるが（中野・柴田1995）、陶磁器の新旧年代を捉えるには有効と考え、この表記に沿って示した。
 *△の表記は分類が明確でないものを示す。例）馬越4区SD50 白磁皿ⅡorⅢ→白磁皿Ⅱ類とⅢ類欄に△マーク
 *◎は複数出土を示す。

点である。次に、これらを貿易陶磁器の編年に沿ってまとめた(第9表)。八町と、馬越6区の出土パターンが比較的類似しているが、八町がC・D期に限定されているのに対し、馬越遺跡全体としてはC～F期にわたり出土が認められる点において異なる。和多地はE・F期の出土はみられないがC・D期を比較するとD期がC期の量をやや上回っている。

6 まとめ

馬越遺跡から出土した陶磁器は、越州窯系青磁などの初期貿易陶磁器は含まず、白磁碗Ⅱ～Ⅷ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、同安窯系青磁碗Ⅰ類が搬入の主体である。その時期については、白磁碗Ⅱ・Ⅳ類が12世紀中頃までに、白磁碗Ⅴ類・龍泉窯系青磁碗についても12世紀末から13世紀初頭までには伊予に搬入されたと検討されている(中野・柴田1995)。当遺跡においても、第

4項(2)の①～⑥に挙げた特徴からこれを追認できたと考えている。さらには白磁碗Ⅱ・Ⅳ類は古相を示すが、Ⅳ類については長期間にわたり残存していたことが窺え、また白磁碗Ⅳ類とⅧ類には年代差があり、その過渡期にⅤ類の出現があると推察される。

調査区別では、5区を中心とした出土状況が確認できた。4区と6区の様相の相違などは、遺構の検討やその他の遺物について調査をおこなっていないために想像の域を脱しないものの、集落内における中心域の移動や居住施設か付帯施設の拡張など、変遷の一端を示したものと言える。遺跡全体としては白磁優勢の状況が認められたが、9区においては青磁が優勢となっており、必ずしも様相は単一ではないことも指摘しておきたい。

最後に周辺遺跡との比較も若干ではあったが試みた。八町が初期貿易陶磁器を出土していることなどから、国府や国衙との関わりの中で古代から営まれた蒼社川右岸の集落であることに対して、馬越遺跡は、それらは出土しないものの楠葉型瓦器碗の確認などから畿内との関わりを背景に持っていたことが想定され、12世紀中頃以降、急速な発展を遂げた蒼社川左岸の集落といえる。多量の碗・皿の中にあつては少数出土と捉えられる白磁袋物などの奢侈的遺物が、遺跡の広い範囲で出土しており、受容層の高さが窺える。そして、右岸に展開する八町は、13世紀前半より後は終息に向かうが、左岸の馬越周辺はその後も存続していたと考えられており(柴田2004)、遺構出土の貿易陶磁器からもそれを示唆する状況が認められた。13世紀前半は歴史的背景からいえば、源平の争乱後、古代的支配から中世へと変化を遂げている時期でもあり、集落の消長問題は、それらに起因することが考えられるが、今回の結果を得て断言できるというものではない。

なお、ごく少数ではあるが青花の出土が確認できた。その様相は明確ではないが、中世後期における流通拠点以外での一例と言える。

7 おわりに

今回は馬越遺跡の貿易陶磁器を対象に調査をおこなった。他の遺跡についても見直す機会を持ち遅々としながらも資料化に努め、社会全体を考える手がかりとしていきたい。しかし、良好な資料を前に筆者の力量不足により、その価値を最大限引き出せていないであろうことを申し訳なく感じている。資料化の手法についても自らの課題である。

最後になりましたが、遺物借用・掲載について快諾していただきました今治市教育委員会をはじめ、倉庫内より遺物を取り出す作業、様々な助言・協力をいただきました、丸毛のぞみ氏・柴田圭子氏・松村さを里氏・高井保子氏・山内英樹氏・郷田秀和氏・池尻伸吾氏には深く感謝申し上げます。なお、執筆にあたり埋文センターには多くのお力添えを賜りました。併せてお礼申し上げます。

(2007年2月28日)

註

- 1) 伊予国府の所在地については現在も不明であるが、古国分寺説・出作説・町谷説・中寺説・八町説・上徳説の推定地がある。
- 2) 八町1号遺跡2次調査と馬越和多地遺跡2次については報告書の掲載分のみを対象にしている。

参考文献

- 梅木学文・兵頭勲2006『馬越和多地遺跡2次』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
愛媛県史編さん委員会1986『愛媛県史 資料編 考古』
- 大滝雅嗣ほか1989「八町遺跡」『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 岡田敏彦ほか1984「片山内福間遺跡」『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 小野倫良2001『馬越遺跡発掘調査報告書』今治市教育委員会
- 柴田圭子2004「中部瀬戸内の流通と交通」『中世西日本の流通と交通』橋本久和・市村高男
中世土器研究会1995『概説 中世の土器・陶磁器』
- 續伸一郎1995「11[3] 中世後期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 中野良一・柴田圭子ほか1995『八町1号遺跡-2次調査区-』今治市教育委員会
- 中野良一2006「第6章 総括」『馬越和多地遺跡2次』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 宮崎亮一2000『大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』太宰府市教育委員会
- 森田 稔1995「8 中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 山本信夫1995「11[2] 中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

中世伊予国の煮炊具について

中野良一

1 はじめに

愛媛県において中世遺跡を対象とした調査が数多く行われるようになって約20年が経過し、その間、膨大な量の遺構や遺物が検出されてきた。これらの資料に対する研究は必ずしも活発であったとは言い難いが、主に土器様相の把握に主眼をおいた研究については一定の成果を収めているものと評価できる。なかでも供膳具の椀や杯・皿については、一括出土を前提とした編年案がほぼまとまっておri(中野1989・2004、柴田1994)、調査事例の多い松山平野と今治平野での様相の違いなども明らかとなってきた。しかし、煮炊具については低調で中世を通して体系的にまとめられた成果は極めて少ない。¹⁾そこで、本稿では煮炊具の器種分類をもとに形態的特長を解説するとともに、代表的資料について中世全体を通した位置付けを考察し、時代ごとの流れや変化について概観する。

なお、本稿のベースとなっているものは、昨年12月に開催された日本中世土器研究会「土製煮炊具の諸様相」の四国事前検討会のためにまとめた資料である。その資料のなかに一部訂正が必要な箇所が見つかったのでここに併せて訂正する。²⁾

2 器種分類と特徴 (第1図)

煮炊具の器種は古代末から中世を通して甕、鍋、釜の大きく3種に分類できる。

甕

古代からの系譜がおえる甕をA³⁾とする。長胴タイプの1と、寸胴タイプの2に分けられる。口縁の外反が強く内外面ともに刷毛目調整が施される。

鍋

器形的特徴から大きく5つのタイプに分類できる。

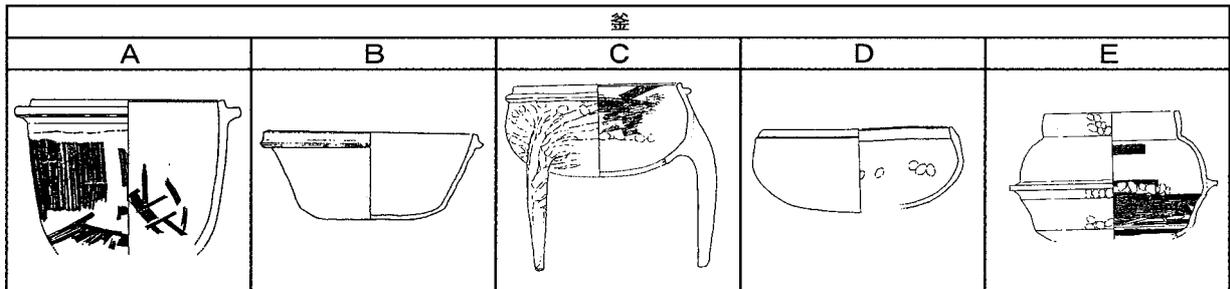
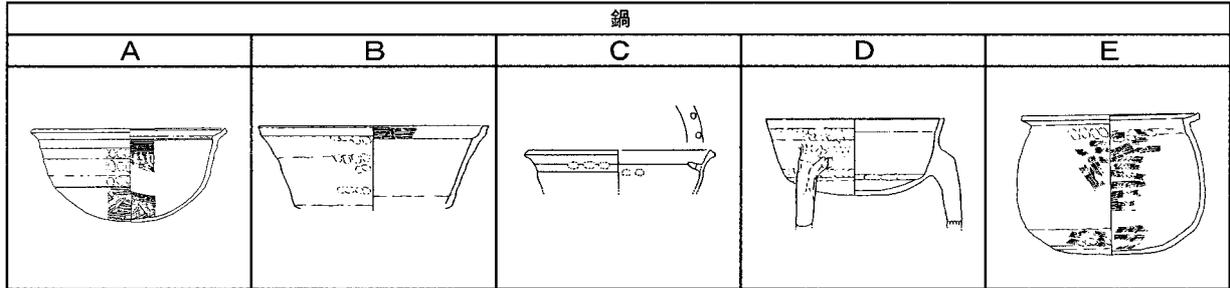
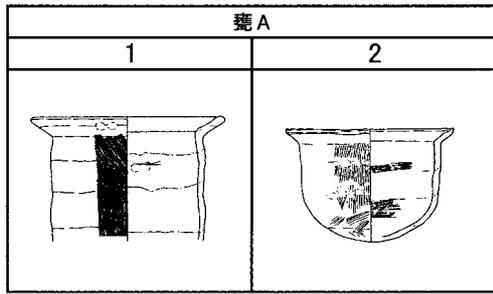
器高に対して口径が大きく、口縁部の外反が強いものをAとする。底部は丸みの強いものと丸みが弱く平底に近いものもある。内外面ともに刷毛目調整や指頭圧調整が顕著に施される。

口縁部の屈曲が受け口状を呈するものをBとする。

口縁屈曲部の内面に耳状の突起を貼付け円孔を穿った、いわゆる「内耳鍋」をCとする。器高はA・Bに比べかなり浅くなる。

鍋Bに三足を付けたものをDとする。内外面ともに指頭圧調整が顕著である。このタイプの出土遺跡は現在のところ限定的である。

口径と器高の割合に大きな差がなく器形的には甕に近いタイプのものをEとする。このタイプも現在のところ限定的出土である。



第1図 器種分類

釜

口縁部および口縁直下、または胴部の外面に鏝状の貼付けをもつものを釜とする。器形的な特徴から5つのタイプに分類できる。

口縁部外面の直下に幅広の鏝を貼付け、直線的な長胴のタイプをAとする。いわゆる「摂津C型」の釜である。外面に刷毛目調整のみられるものが多い

鏝をもつ口縁部から底部にかけて直線的に窄まる形態のもので底部は平底に近いものをBとする。形態的には滑石製石鍋に極めて似ている。

足付きのものをCとする。鏝の大きさや断面形状と接合位置、また、胴部の形状にはバリエーションが多い。

鏝は完全に形骸化し、口縁部に僅かに認められる程度のものをDとする。胴部と底部は丸みが強くて器高は浅く指頭圧調整がみられる。

いわゆる「茶釜」形態のものをEとする。鏝の位置や全体形状にバリエーションが多い。ほとんど瓦質製品である。

3 各器種の変遷と地域性 (第2・3図)

器種の年代的位置付けは、できるだけ良好な遺構一括出土土器を使用し、年代観の明らかな瓦器碗や東播系こね鉢、備前焼などの共伴遺物を基に検討した。

甕Aは時代が下るにつれて長胴タイプから寸胴タイプに移行する。口縁の屈曲も徐々に弱くなる傾向があり、11世紀には寸胴タイプが多くなる。12世紀後半になると寸胴タイプの甕は見られなくなり、口径の大きな鍋が出現する。この鍋形土器は16世紀まで継続するが、徐々に口縁の屈曲が弱くなり胴部と一体化(直線的)する器形となる。また、13世紀には受口状の口縁を持つ鍋Bが出現するが、14世紀前半頃までしか確認できず、長期の継続性はみられない。内耳鍋は16世紀後半にはみられる。15世紀代にみられる口縁部屈折の弱い形態の鍋に三足の付いたものが出土している。現在のところ一遺跡に限られ、前後の系譜については不明である。

釜では「撰津C型」の釜Aは、10世紀から11世紀にかけて出土する。その後、系譜がはっきりしないが三足の付かない鏝付の浅い釜Bが13世紀に出現する。14世紀代までは確実にみられるが絶対量は少ない。対岸の安芸国などにみられる釜(鋤柄1997)に類似している。釜Dは15世紀の半ば頃に出現するが、16世紀には鏝は完全に形骸化し、口縁直下に僅かに突起として認められるのみである。現時点では両者が系統的に繋がっていると見通しているが、鏝形態の変化が大きい点に課題は残る。

釜でも三足の付く釜Cは、12世紀後半から13世紀初頭にかけての代表的遺跡である今治平野の八町1号遺跡ではまったく出土していない。しかし13世紀半ばから14世紀代に盛期をみる馬越遺跡では出土していることから、13世紀でも後半には確実に出現していると考えられる。瓦質のものは13世紀前後からみられるが、搬入品の可能性も考えられる。三足付き土釜は形態的に鏝の位置や胴部の形態、足の長さや太さ、接着位置など極めてバリエーションが多いが、年代が下るにつれて鏝は形骸化して低くなり、器高は浅く足は下方に付くようになる傾向が看取でき、16世紀までみられる。

釜Dの茶釜は13世紀にはみられる。16世紀にかけて地域の拠点となる集落からの出土例は多い。

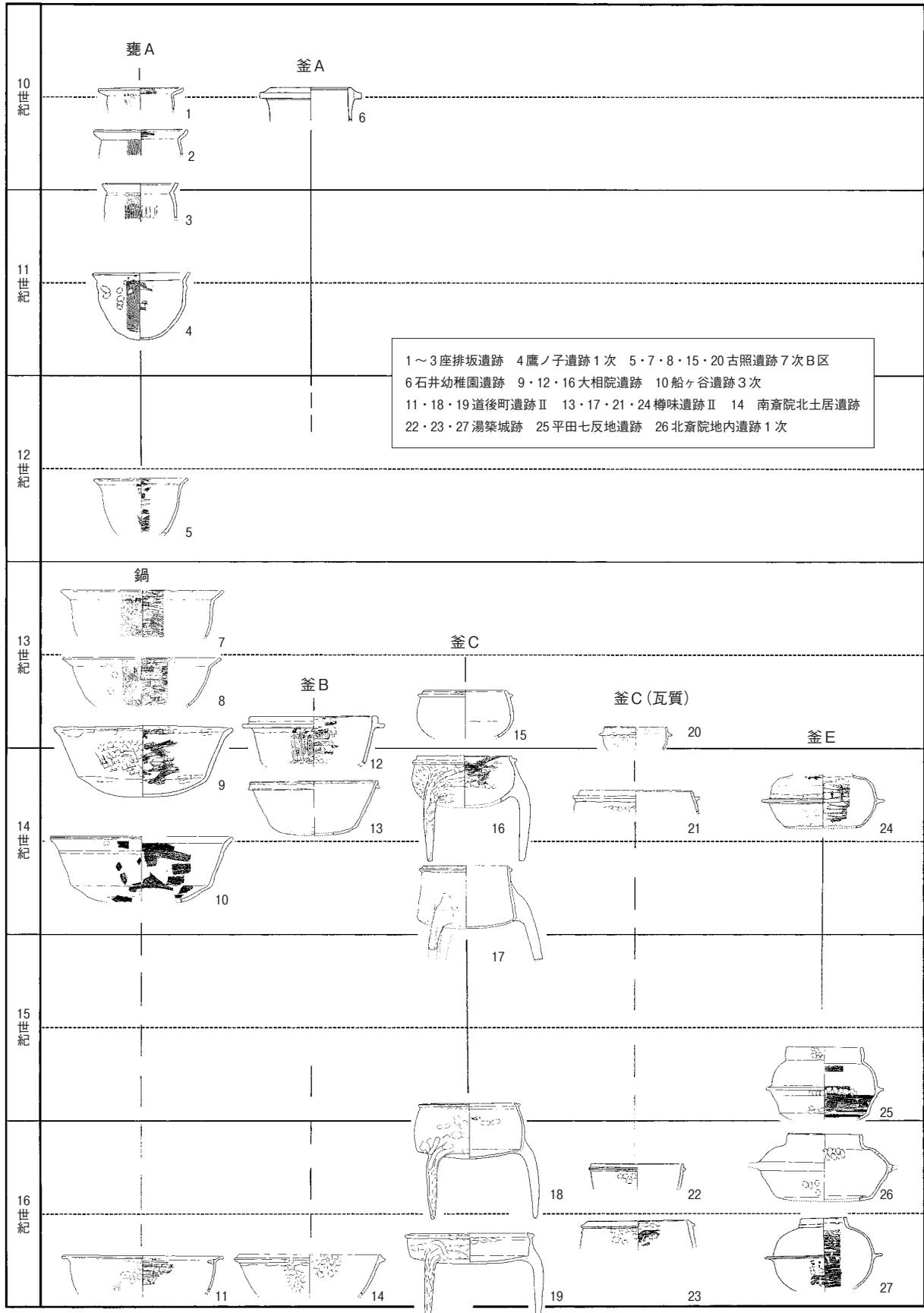
上記のような変遷をたどる各器種の地域による差異について検討する。特に調査件数の多い松山平野と今治平野、および現西条市西部域を中心とする道前平野における傾向を比較する。

甕や鍋については両平野とも器形や変遷に大きな差異は認められない。ただ受け口状を呈する鍋Bについては今治平野の遺跡では出土しているが、松山平野では確認できない。また、鍋Dも同様である。

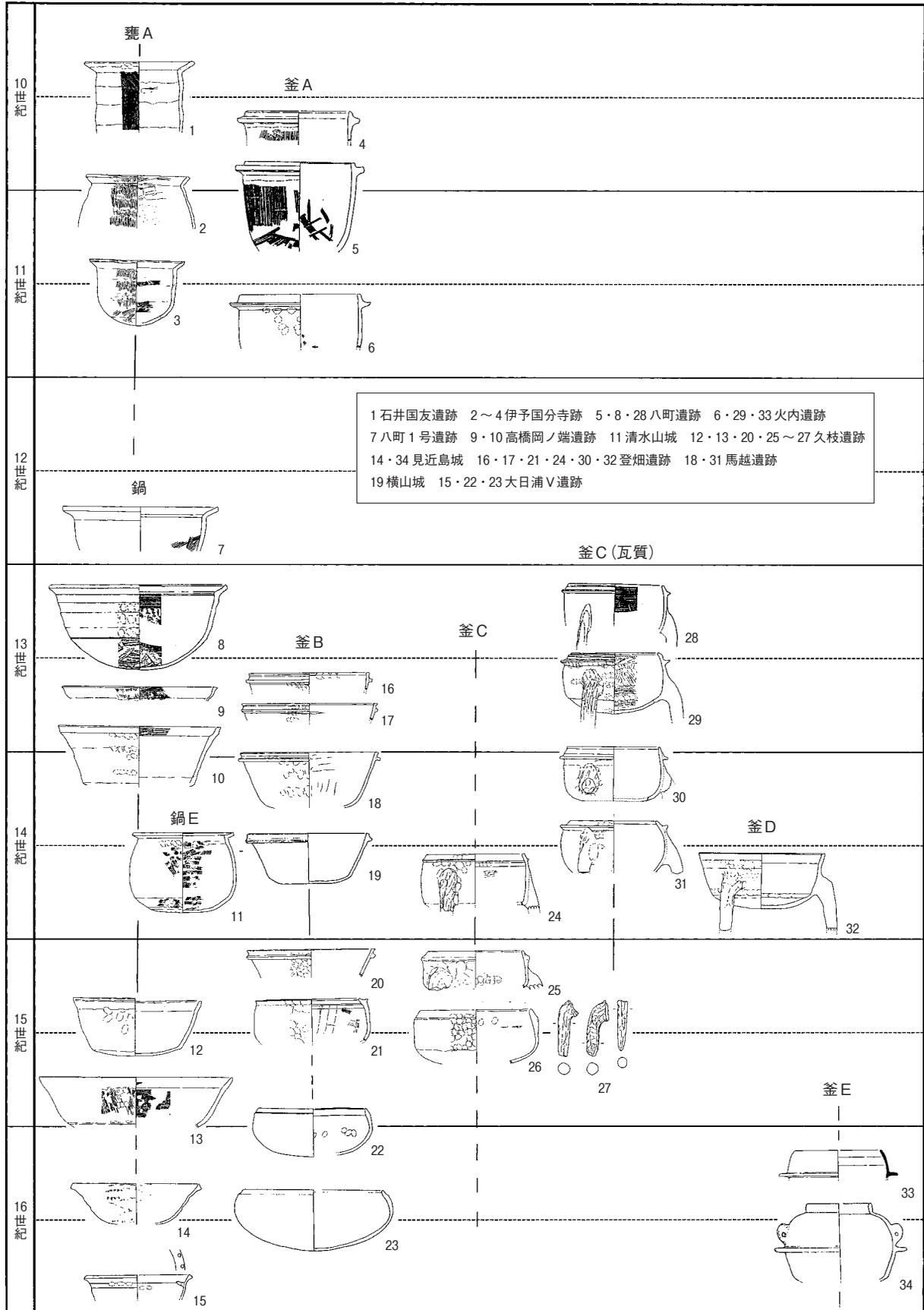
釜AとBの14世紀までは大きな差異は認められないが、口縁部の鏝が形骸化し、胴部が丸みをもっている釜(東予21~23)については、今のところ松山平野での出土はみられない。松山平野では南斎院土居北遺跡でみられる釜B(14)のように、14世紀の樽味遺跡でみられる釜B(13)より僅かに鏝部が小さい釜が出土している。15世紀前後に良好な資料を見出せていないが、形態的にみて系統的な繋がりが追えるものであろう。

松山平野部は12世紀と15世紀代に良好な資料が少なく系譜・系統が確実に繋がらないが、概ね今治平野部などの状況と同様だろうと推察しても大過ないであろう。

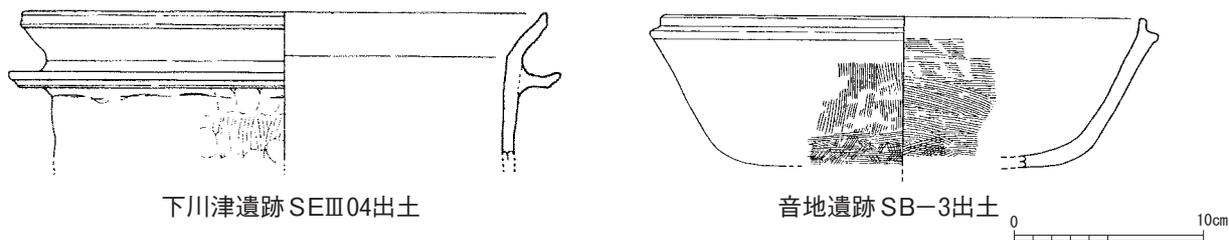
伊予 松山平野・北条平野（中予）



第2図 編年案(1)



第3図 編年案（2）



第4図 讃岐・伊予西部の土器

4 各地の諸相（第4図）

ここでは松山平野や今治平野・道前平野以外の調査件数の少ない地域について、代表的遺跡の資料をあげ上記資料との比較検討を行う。

伊予東部地域

道前平野から東は、中世の遺跡がほとんど知られていない地域であったが、ここ数年調査事例が増えつつある。県内最東端の四国中央市（旧川之江市）では近年国道バイパス建設に伴う上分西・上分乗安遺跡の調査が実施され、古代から中世にかけての遺構・遺物が検出された。なかでも上分乗安遺跡では摂津C型の釜が多くみられる。また、過去にほとんど出土類例のない長胴の甕（第4図左）がみられる。この土器は10世紀から11世紀にかけて隣国讃岐で出土する土器と酷似している。一方、新居浜市星原市・星原市東遺跡C地区では、掘立柱建物や土師器杯を中心とした一括廃棄土器を含む土坑など、14・15世紀を中心とした資料が充実しているが、一部は16世紀にかけての良好な土器を出土している。煮炊具は包含層資料が中心であるが、釜BとCが出土している。三足付土師器釜の鋳部は形骸化し、だらっとした帯状の小突起となり器高は浅い。内外面ともに指頭圧調整が顕著で、一見したところ道前平野の久枝遺跡出土土器（東予27～29）に良く似ている。

伊予南部地域

松山平野以西の地域でも調査件数は少なく、煮炊具に関しては断片的な資料がほとんどで様相はつかみにくい現状にあるが、西予市（旧宇和町）の音地遺跡出土資料をみってみる。音地遺跡は岩瀬川の形成した河岸段丘上に営まれた集落で、出土遺物から15世紀代を中心とした遺跡である。遺物の大半は居住区を区画したと考えられるSD-1から出土しており、土師器杯・皿、貿易陶磁器、瓦質土器、備前焼などがみられる。煮炊具には釜Bと茶釜があり、釜Bは口縁部が特徴的（第4図右）で中・東予では類例をみない。胴部は内外面ともに刷毛目が施されているが、外面底部は縦横に細かく刷毛目が入れている。この土器に関して資料の限られている現時点においては、釜Bとまったく別系統の釜と考えるより、バリエーションの一つとして捉えておきたい。

以上、限られた資料の中から県内全体を見渡してみたが、東部に関しては上分乗安遺跡からは地理的または商域的テリトリーが背景に存在する可能性がみえ、南部ではまだまだ体系的把握のための資料が不足している現状である。

5 四国全体での位置付け

伊予国の状況について検討してきたが、四国の中ではどのように位置付けられるのかをまとめる。詳細については研究会資料（吉成 2006）にまとめられているので参照していただきたい。

古代からの系譜がおえる甕について、長胴から寸胴への変化という点では四国全体で大きな差異はなく、次の鍋の出現時期は概ね12世紀で、口縁部が屈曲し底部が丸みをもつ形態で共通する。また、形態変化も大きくとらえれば齋一的である。

釜については摂津C型の消滅後、足付と足無の釜が出現する。時期的には阿波の吉野川下流域がやや早く12世紀代であるが、量的に多くなるのは13世紀に入ってからである。生産性が増大するのは伊予では13世紀後半からで、他国よりやや遅れ気味である。15世紀頃に鍔部が形骸化し、低く幅広に変化する在り方はほぼ四国的様相である。ただ、伊予だけは胴部下半や底部に一切叩きを施さない製品で統一されており、叩きの入った釜が出土するとそれは搬入の可能性が極めて高いといえる。

足の付かない釜Bは伊予では14世紀に一定量みられ、阿波でも少量が認められるが広がりを見せていない。鍋Bに足の付いたタイプの鍋Dは、伊予でも一遺跡だけで出土しているが、伊予以外ではみられない。この二つの器種は備後・安芸国や周防・長門国といった瀬戸内海を隔てた伊予の対岸でみられるもので、それらの国と今治との特別な関連の中で生産されたものであろう。

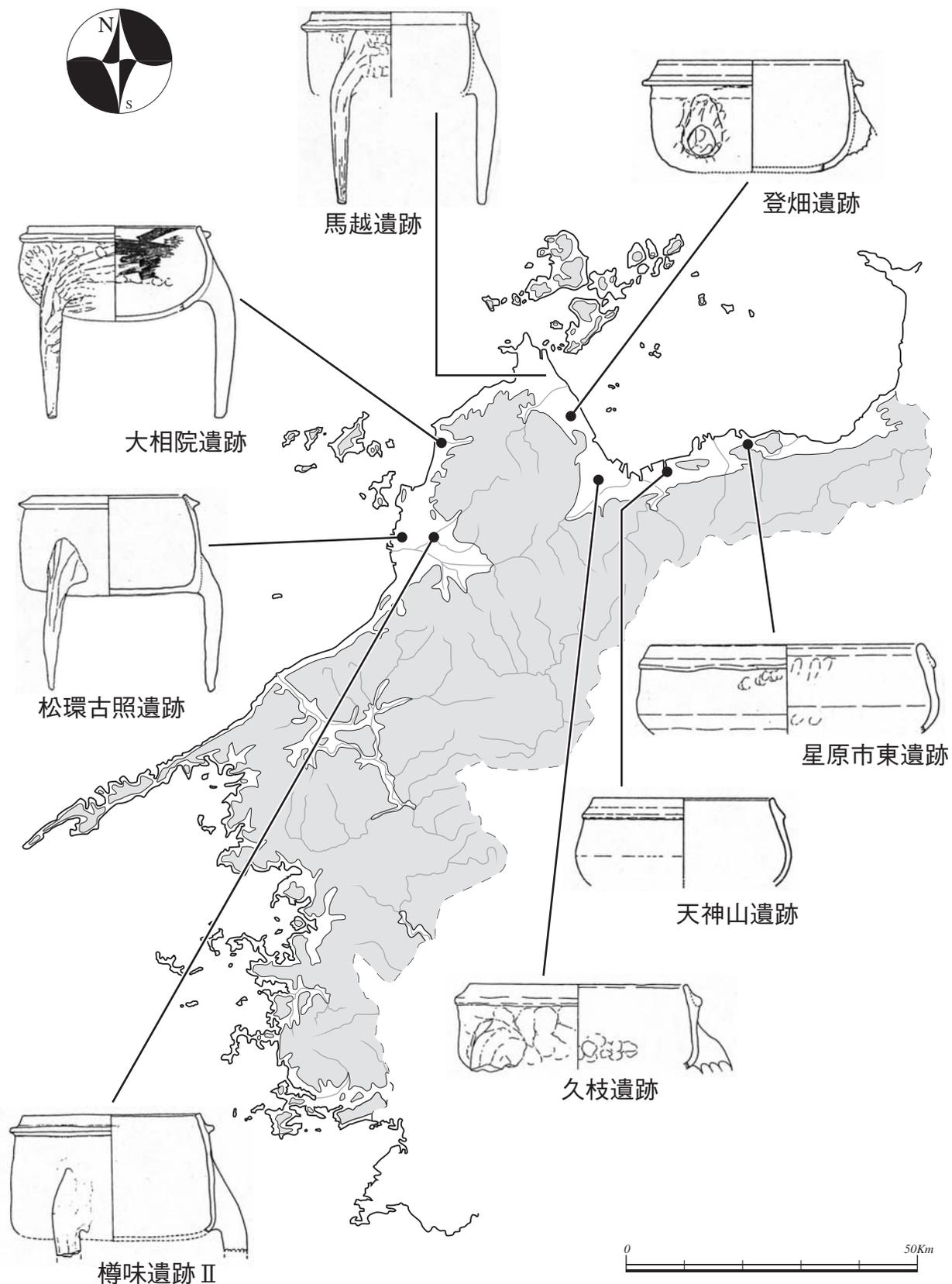
6 生産体制に関する予察（第5・6図）

食生活に欠かすことのできない煮炊具は、どのような体制の下に生産されていたのであろうか。この問題を解決するためにはまず生産遺跡について検討する必要があるが、生産遺跡を特徴付ける遺構とはどのようなものであろうか。

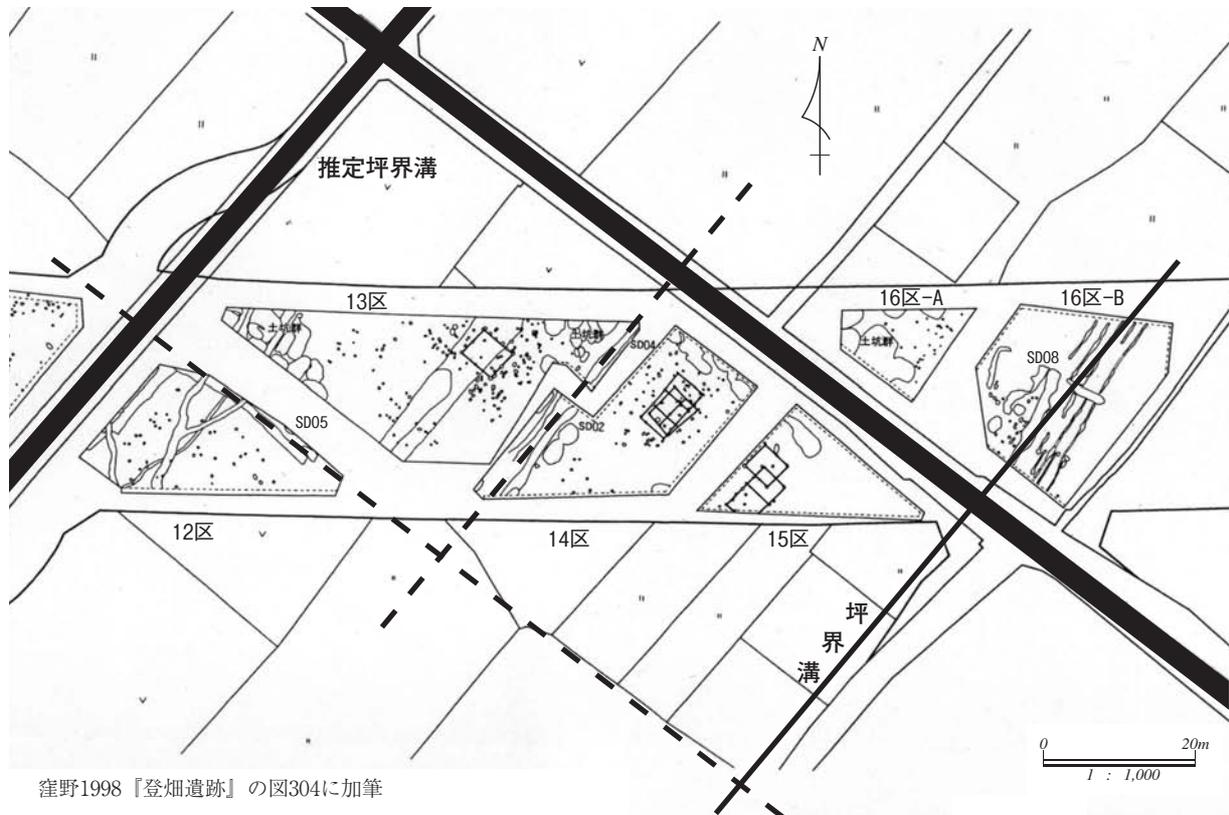
土器全般についていえることとして、材料である粘土の採掘跡や焼成遺構の検出が重要であることはいうまでもない。また、これらの遺構の間近に存在するであろう土器製作のための作業場の存在も重要である。しかし、この条件を満たす遺構がすべてそろっている遺跡は、県内においては見出せていないのが現状であるが、今治平野に所在する登畑遺跡については唯一その可能性が指摘できる遺跡である。

登畑遺跡の16区では、三足付土釜の足部（体部接合痕跡の確認できるもの）が300本も出土している。個体数にして100個体分となる。足以外の胴部片についても使用痕跡（外面の付着物質や火の痕跡）が認められないものが大半であることから、製品となる前の段階で破損したものを廃棄したものと考えられている。また、隣接する13区や16区の一部では不整形を呈する土坑群（深さ15cm～50cm前後）が検出されている。近隣の試掘によって粘土層が確認されていることから、報告者はこの土坑群を煮炊具生産のための粘土採掘土坑とみている。また、この地のホノギが「釜屋敷」であることも煮炊具生産地の可能性を暗示しているといえ、筆者もこの見解に異論はない。

道路幅という限定的な調査範囲ではあるが、12区から16区の間には一町間隔の溝が検出されている。図6の16区-BのSD08がそれで、いわゆる条里地割に関連する坪界溝とみることができる。また12区SD05、13区SD04、14区SD02は半町の距離にある溝である。ここ登畑では14世



第5図 14~15世紀の釜C



窪野1998『登畑遺跡』の図304に加筆

第6図 登畑遺跡12区～16区全測図

紀でも条里地割が残存し、およそ一町四方の中の最低3箇所粘土採掘が行われ、隣接する掘立柱建物で一連の生産が行われていたと考えることができるであろう。

しかし、生産遺跡が一箇所しか見出せていないのでは、ある一定の地域においてどのような体制で生産されていたのかを明らかにすることはできない。そこで、器形的バリエーションの最も多い三足付の釜Cの分布から、生産体制に対するヒントを探ってみる。

釜Cは13世紀代に出現し、16世紀まで継続する中世煮炊具の最も代表的な器種である。なかでも特に出土数の多い14世紀から15世紀についてみてみよう。

登畑遺跡で生産された釜Cは土師質と瓦質のものがあり、さらに胴部が直線的なものと丸みの強い器形のものが存在する。同じ今治平野内の遺跡では馬越遺跡で胴部形態の良く似た釜がたくさん出土している。これらが登畑遺跡で生産された製品であると断定するのは早計であるが、可能性を示唆しておきたい。一方、松山平野域での同時代遺跡として、旧北条市の大相院遺跡 SD-001 から釜Cがまとまって出土している。登畑資料に比して総体的に胴部の器高が浅く、調整に刷毛が多用されている点に大きな違いをみせる。松山市東部の樽味遺跡1号溝からも釜Cが出土しているが、胴部の器高が深く直線的な形態のものが目立ち、大相院例や登畑例とも違いを見せてい

る。松山市西部の松環古照遺跡Ⅳ調査区第2小区の2号溝出土の釜Cは、先述したいずれの釜とも形態差がある。このことから同形態の分布域は今治平野部ではまとまりがあり、松山平野部の東部と西部、また北部の北条平野ではそれぞれ形態に違いを見せていることが明らかで、松山平野部においては、比較的小地域内でのまとまりに終始している可能性が高いといえる。

上記資料より若干時期が下ると考えられる道前平野の久枝遺跡SD11出土の釜Cは、先述したように新居浜市の星原市・星原東市遺跡例と形態的に良く似ている。久枝遺跡と星原遺跡の間に所在する西条市の天神山遺跡でもこのタイプの釜が出土していることから、少なくとも道前平野から新居浜平野までの間では、ほぼ同形態の釜が使用されていたことがわかる。

参考までに16世紀の松山平野の状況を見ると、道後町遺跡（特に第2図19の口縁部や18の胴部）や湯築城跡などに代表される釜Cとほぼ同形態のものが、旧北条市域をはじめとして松山平野全体に認められる。この点で前時代の在り方との相違をみせている。

以上のように釜Cに関しては時代が下るにつれて、同形態の分布範囲が広がりを見せていることが明らかとなった。このような現象は生産体制や流通システムの変化がなければ現れないことであると考えられる。それは各地域の領主が近隣との緊張関係を繰り返しながら、国人領主へと再編されていく流れとまったく無関係ではないと考えられる。今後、生産遺跡の具体的な例がもっと増えることはもとより、土地支配者の構図変化などを加味すればより詳細な体制の変化がみえてくるものと期待される。

ちなみに、鍋Dに関しては登畑遺跡で生産されていることは確実であるが、近隣の今治平野の中でもまったく出土していないことから、釜Cなどとは流通圏や販路が違っている特別な製品であることも考えられる。鍋に三足を付けたものはいわゆる防長系のものが有名であるが、その出土事例は瀬戸内北岸と北部九州の一部に限られる（岩崎2006）など、広範に流通しない特殊な製品として位置づけられる。今後、この形態の出土については十分に注意すべきである。

7 おわりに

煮炊具の特徴や編年的位置付けについて検討してきた。調査件数の多い松山や今治などが中心であったが、その様相は四国全体の中でも大部分に共通性が認められ、違和感のない結果となった。また伊予の特殊性の一部も明らかになった。今後さらに研究を深めるためには生産地の特定が重要であることはいうまでもないが、ずばり生産地と特定できる遺構にあたることを過度に期待できないので、出土遺物からのアプローチが大切である。そのためにも同一箇所や同一工人集団の生産品であることを何で認定するかが一つの鍵となるであろう。その点についても研究はやっと始まったばかりである。

(2007年3月31日)

註

- 1) 1994年の第4回四国中世土器研究会は「10～16世紀代の煮沸形態」というテーマで実施され、当時、松山市埋蔵文化財センターの岡根なおみ氏が煮沸具を釜・鍋・茶釜に分類して、伊予の状況を説明した。

- 2) 編年表に使用している土器の中で、今治平野・道前平野の24の土器（耳金城出土）は胴部と足が別個体であることが明らかとなったので削除する。また、時期幅を再検討の結果、今回の編年で若干移動させたものがある。
- 3) 甕にはAタイプの他に直口する口縁に球形の胴部をもち、内面黒色のタイプも国分寺跡の確認調査（藤村2001）で出土しているが、畿内黒色土器碗とともに搬入されたものであり、現時点では在地生産に影響を及ぼしていない製品と判断し、分類に入れていない。将来的に在地生産が確認されれば、甕Bとなる。

参考文献

- 松村淳ほか1993『和気・堀江の遺跡』松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 西川真美2000『道ヶ谷古墳・池の奥遺跡・平田七反地遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 加島次郎ほか1999『船ヶ谷遺跡—3次調査地—』松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 梅木謙一1994『斎院の遺跡』松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田正芳1994『古照遺跡—7次調査—』松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 中野良一ほか2004『南斎院土居北遺跡・南江戸鬮目遺跡2次調査』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 栗田茂敏1994『石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡』松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 上田真1991『南江戸鬮目遺跡』松山市立埋蔵文化財センター
- 梅木謙一1992『来住・久米地区の遺跡』松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 田崎博之1993『樽味遺跡Ⅱ』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 中野良一ほか1998『湯築城跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 寺嶋信三2005『道後町遺跡Ⅱ』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 三好裕之2004『善応寺畦地遺跡・大相院遺跡・別府遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 櫛部大作1999『石井国友遺跡』今治市教育委員会
- 廣田秀久ほか1997『野間入鹿谷・清水山城遺跡発掘調査報告書』今治市教育委員会
- 小野倫良2001『馬越遺跡発掘調査報告書』今治市教育委員会
- 小野倫良2002『高橋岡ノ下遺跡・高橋具禪寺遺跡・高橋岡ノ端遺跡』今治市教育委員会
- 藤村啓修2001『伊予国分寺跡確認調査』今治市教育委員会
- 窪田賢治1998『登畑遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 阿部勝行ほか1998『火内遺跡・臥間遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 中野良一ほか2005『福成寺遺跡・旦之上遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 野口光比古1983『見近島城跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 柴田昌兎『久枝遺跡・久枝Ⅱ遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 作田一耕1994『大日裏Ⅴ遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 西川真美ほか1994『横山城跡・船形遺跡・地藏原遺跡・尾土居窯跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 多田仁1994『大日裏Ⅴ遺跡・大田池東遺跡・妙口遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 多田仁2003『定常寺・伊崎越城跡・音地遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター

- 楨光一郎2005『願連寺泉遺跡・願連寺元泉遺跡・願連寺建ヶ内遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 三好裕之2004『星原市遺跡・星原市東遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 野口光比古1993『天神山遺跡』西条市教育委員会
- 岩崎仁志2006「西部瀬戸内」『土製煮炊具の諸様相』日本中世土器研究会
- 吉成承三2006「四国の煮炊具」『土製煮炊具の諸様相』第25回中世土器研究会 日本中世土器研究会
- 鋤柄俊夫1997「畿内周辺」『中世食文化の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第71集 国立歴史民俗博物館
- 片桐孝浩1992『川津元結木遺跡』愛媛県埋蔵文化財研究会
- 柴田圭子1994「伊予における15・16世紀の土器様相」『15・16世紀の土器様相』第6回四国中世土器研究会発表資料
- 四国中世土器研究会1996『古代から中世にかけての壺・甕・鉢』第7回四国中世土器研究会発表資料

編集後記

研究紀要『紀要愛媛』第7号が完成いたしました。

多田は香川県音谷池遺跡の採集資料を紹介しました。発見された資料はサヌカイト製の細石核で、九州地方との関連を示唆できる船野型細石核と呼ばれるものでした。ハリ質安山岩製の細石核が主体となる本地域にあっては異質なものと考えられますが、船野技法の伝播を解釈する上での貴重なデータとなるでしょう。山内は観音山古墳と桜山古墳の埴輪資料を報告しており、松山平野における古墳時代中期から後期における埴輪の変遷を考えました。さらに、これら資料の検討から古墳時代中期以降における埴輪生産の新しい画期を予察しています。神石は1997・1998年に発掘調査が行われた今治市馬越遺跡の再検討を行っています。分析は貿易陶磁器に関する数値データを基にしており、調査区別での様相差を明確にできたといえます。中野は愛媛県内の中世土器、主に煮炊具についてその編年案を提示しました。さらに松山平野や今治平野などの小地域によって形態差が見出せることから、生産や流通の変革を示唆しています。

今回は新資料の発見や調査事例の再検討が行われ、特に中世土器に関する詳細な分析と編年試案の提示は興味深い内容となりました。今後も類例の増加とともに比較検討が必要となるのはいうまでもありませんが、調査研究の新たな展開に向けて、本書が活用されることを期待します。

(多田)

(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター研究紀要

紀要愛媛

第7号

平成19(2007)年3月31日

編集・発行 財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター
〒790-8025 愛媛県松山市衣山四丁目68番地1
TEL (089)911-0502 FAX (089)911-0508
印刷 アマノ印刷株式会社
